

鉤 と 霊

——有鉤短剣の研究——

春 成 秀 爾

I はじめに	2 有鉤短剣の頭部と腰飾
II 有鉤短剣の分類	3 有鉤短剣と腰飾の系統関係
1 角製・木製短剣	IV 有鉤短剣の意義
2 骨・角・牙製腰飾	1 有鉤短剣の着装者
3 角製Y形把頭	2 有鉤短剣の機能
III 有鉤短剣の変遷	3 有鉤短剣の社会的背景
1 有鉤短剣の出現時期	

I はじめに

縄文時代に「叉状角製品」および「腰飾」と呼ばれている骨角製品がある。小稿では、これらの遺品の検討を通して、縄文時代における霊と社会構造との関係について、僅かではあるが論及してみたいと思う。

「叉状角製品」は、鹿角の角幹と叉状に分岐する枝を利用したY字形の短剣状、または鳥形ないし逆さの自在鉤状のものに対して与えられた名称であって(樋口 1955)、その最大例は前者は長さ 38cm に達し、後者は 26cm を超す概して大形品である。

一方、「腰飾」は、岡山県津雲遺跡で 1919 年、縄文晩期の埋葬人骨の腰部から発見され(清野 1920: 49~51)、間もなくそのような名称で呼ばれるようになったものである(清野 1923: 18~20, 長谷部 1924: 161~163)。腰飾は元来、出土位置によってつけられた呼称であったために、その後、相互に関連の認めがたい形態のものまで、一つの名称のもとに呼ばれるような結果になってしまったが、その多くは鹿角製で1個の鉤状の突起をもつ小形品である。

すなわち、「叉状角製品」も「腰飾」も鉤状突起をもつという点で共通する。また、後述するように、本来、前者は短剣、後者はその把頭として出発したものである。

ただし、この種の角製品のなかには身の断面が円形で刃をもたず先端だけが尖っている例が少なくない。その一方、剣という名称は本来、両刃のあるものに対して付されるという問題がある。といって、例えば「刺突具」とか「尖頭器」といった名称

I はじめに

は、漁猟具を連想させるところがある。無難ないい方をすれば「尖頭棒」であろうが、ここでは武器としての性質を明示する「短剣」の呼称を採用し、「有鉤短剣」をその総称として使用しておきたい。

それに比して、「腰飾」の呼称はもっと厄介である。それは、有鉤短剣の把頭とそれから転じて腰飾となったものの二者を含んでおり、しかもそのどちらかの区別を明瞭にしがたいものを含んでいるからである。そこでとりあえずここでは従来の呼称をそのまま使っておくことにしたい。

さて、有鉤短剣および腰飾の存在は、大正時代、わが国における古人骨の大発見時代の副産物として知られるようになったのであるけれども、過ぎ去った年月の割には、研究の蓄積は少ない。

長谷部言人氏は早く、「鹿角製腰飾」が「指揮杖、笏の類」の柄であることを見抜いていたが（長谷部 1924：163）、それ以上に論を展開することなく終った。

その一方、松本彦七郎氏は、宮城県川下リ遺跡出土の「叉状角製品」について、「先端をよく尖らせて、以て短剣としての要素を附与」していると考え、「角製装飾短剣」の呼称のもとに記載を行っている。さらに、この種の短剣を、「装飾的要素が少く短剣としての要素に富んだ進化階段にあるもの」、「全く短剣としての要素を失いて単に装飾品となり終ったもの」、その「中間に位置する進化相を示して居る」ものの3段階に分け、「以て或る特に著しい型の角製腰飾の由来を察し得べきである」という示唆的な発言をしている（松本 1929：56～57）。しかし、氏の研究の全貌は公表されることは遂になかった。

「叉状角製品」と「腰飾」の形態分類を初めて行い、その上で用途を考察しようと試みたのは樋口清之氏であるが（樋口 1940・1955）、氏も、結論としては、これらが「一種の指揮棒様の権威とか信仰とかに関係あるものではないか」と推定したにとどまった（樋口 1955：30）。それは、氏も述べているように、「元来この種遺物はその分布限られ、例品亦あまりにも稀少」であったことにも起因していた。

その後、大塚和義氏は、「叉状角製品」の一部について、驚ないしは鳥類を表現したものと考える松本彦七郎氏の説（松本 1929：56, 1930b：32～33）に従い、それは「鳥を表象とする観念」に発し、「他界観念」の存在と関連するとの予想を述べた（大塚 1967：24～26）。しかし、実証的な研究の提示はその後もなされていない。

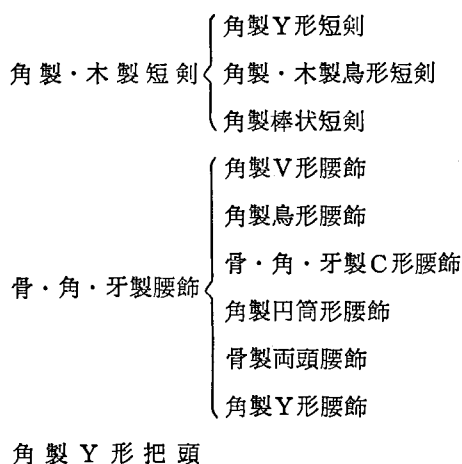
また、中村五郎氏は、『今昔物語』や『融通念仏縁起絵巻』、『七十一番職人尽歌合』等の文献・絵巻物に登場し、また六波羅密寺の空也上人像のもつ鹿角杖の先駆形態として「叉状角製品」をとらえ、鹿角杖の機能についての五来重氏や堀一郎氏の見解

(五来 1969 : 152~153, 堀 1953) を援用することによって、縄文人の信仰に迫ろうとする方向を示した(中村 1969)。ところが、氏の研究においては、鹿角杖については関係史料をとりそろえて一定の見解に達しているのに対して、「叉状角製品」そのものの認識はきわめて不十分であって、そのためにはたして鹿角杖が本当に「叉状角製品」と系譜的なつながりをもつのかどうかの判断は、ほとんどできないのである。

さて、筆者がこの種の資料に関心をもつようになった契機は、縄文晩期の抜歯型式における二者の意味を解明するために、装身具の着装例を援用しようと考えたところにある。その予察的な考えについてはすでに発表したことがあるが(春成 1980・1983)、資料の集成・分類など基礎的な作業が不十分のままにおわっていたので、この機会に実測図を添えてやや総合的な研究を公けにする次第である。

II 有鉤短剣の分類

有鉤短剣の形態・型式は多様である。そこで小論ではまず、その分類から始めることにしたい。分類したそれぞれに適切な名称を与え、個々の具体例をどれかにあてていくことは、容易ではないし誤解も生じやすい。とはいえ、A類・B類・C類……では、形態の異なる個々の遺物を呼ぶのに不便であるから、ここではあえて次のような大分類・名称のもとに、議論を進めていきたい。なお、鳥形短剣の一部とY形把頭は弥生時代に属するものである。また、鳥形短剣の木製品が弥生時代には知られているので、それもあわせてとりあげておきたい。



II 有鉤短剣の分類

1 角製・木製短剣

A 角製Y形短剣

鹿角の角幹と第3枝（ニホンジカには通常は第2枝は発達しない）のなす叉状部を利用してY字形の基部にかえ、角幹の角座に近いほうを尖らせて身部に仕上げた、全体が細長いY字形の短剣状を呈するものである。基部だけは鹿角の両面をのこしているが、剣身に相当する部分は、片面を縦に切り落として緻密質の部分だけを利用して

いる。

唯一の完形品である宮城・屋敷浜例では、身部は途中まで両側縁を鈍い刃部状に加工しているが、先端近くになると断面が不整円形に変わり、先端は鋭く尖っている。鹿角のいうならば一木づくりであるために、側面形は大きく彎曲している。全長38.2cmの大形品である。他の例も、基部の大きさから30～40cmの長さをもっていたと推定される。身部の両側縁が刃部状を呈していることは、宮城・大木囲 a、沼津 b 例によってもわかる。短剣と推定した理由である。

基部は、带状物を編み巻きしたような浮彫りが施され、屋敷浜、岩手・門前 a 例ではその隆起帯の両長側縁に沿って縫目のような小さな列点が付されている。带状部の一端は、宮城・大木囲 a、西ノ浜、南境 a、岩手・田ノ浜 a 例のばあいには、断面が逆U字形を呈する鉤状の突起となって終る。あたかも獣類の皮革製または樹皮製の帯をY字形の頭部に編みながら巻きつけたような印象を与える文様意匠である。なお、門前 a、沼津 a・b 例などは、鉤状突起の先端部を欠き、代わりに巻帯状部を延長している。帯の交叉する部分には反対面まで貫通しない装飾的意味の方孔（田ノ浜 a 例）、円孔（大木囲 a、門前 a、沼津 a・b 例）、三角孔（屋敷浜例）が数個穿たれている。それ以外に、叉状部の身部につながる表側中央下寄りに、やはり裏側まで達しない円孔または三角孔があげられている。ただし、その位置は裏側が存在しない例では貫通孔となっている（田ノ浜 a、南境 a、大木囲 a 例）。しかし、裏側の上に寄った位置に大部分の例では円孔が穿たれ、しかも基部は海綿質が除去されて空洞になっているので、実際には、表側から裏側へは斜めに孔が通ずる形になっている。この孔に紐が通されて、この角製品が垂下されることがあったことは確実と思われる。

また、門前 c 例は、細長い単純形の鉤状突起の先端近くに1条の隆帯をめぐらせている。そして、突起の根元に近いところに三角形、基部の表裏と上に円形の透孔をあけている。基部の内側は海綿質が除かれて大きく内彎し、あたかも半月形の板を左右にとりつけたような形状を呈している。透孔の周辺には、带状の表現が痕跡的にみら

れる。

大木皿b例は、実見していないが、前者と同類らしく、突起は、途中に2条の隆帯があり、先端には段をつけて頭部を形づくっている（樋口 1955：28）。基部には真ん中に凹点をもつ円形を3個少しずつずらせて重ねた文様が浮彫りされている。これは鳥形短剣の沼津a例の文様に似るところがある。

Y形短剣は、これまで宮城・岩手の両県からのみ出土し、所属時期は縄文中期後葉から後期前葉に限られている。

B 角製・木製鳥形短剣

角幹と第1枝または第3枝のつくる又状部を利用して、自在鉤を逆さにした形状に加工したものである。角幹を長くにとって身部とするが、その断面は円形で、先端にいくにつれて細くなり鈍く尖って終るものが多いが、先端に打製石器を装着して一層尖鋭にしている例もある。弥生時代にはその木製品が知られている。

縄文中・後期 又状部角幹側の側面に貫通孔を有し、第1枝または第3枝の前部に水平方向の深い抉りを入れている例があり（宮城・川下り、青島、沼津a、南境a、岩手・細浦a例）、一見、鳥の頭部および頸部の形を連想させるところから、「鳥嘴形角器」（大塚 1967：24～26）、「嘴状角器」（楠本 1973：256）などと呼ばれてきた。

頭部は、東京・千鳥久保例では円孔の周囲に1～2本単位の直線を沈刻して、頭部と身部との区別を明瞭にしている。前部は短く、端部には正面からみて十字形に刻みをいれている。この例は、鳥に似ているとはいいがたい。川下り例は第1枝を長く利用し、そこに横方向の深い抉りをいれているので、嘴の長い鳥類を連想させる。報告者の松本彦七郎氏は「恐らく鷺の頭及頸を象って作ったもの」と考えている（松本 1929：56）。頭部は両面とも雲形とL字形の浮彫りを組み合わせており、それぞれ1貫通孔をもっている。前方の孔は2本の沈刻を組み合わせて縁どっている。

沼津a例は、頭部片面に逆S字形を浮彫りし、2個の凹点を加えた文様をもっている。嘴部はないが、川下り例の意匠が簡略化されたようにみえる。この例では、後部上端から頂部後端へ抜ける孔が穿たれており、他と異なる。南境a、川下り、細浦a例は、側面に2孔をもっている。しかし、南境a例の前部の孔は両面からあけられているが盲孔であって、2孔の機能は区別されている。千葉・向油田、南境b例は頭部側面に孔をもっていない。向油田・南境c例には、両側面とも口辺近くから身部へかけてへ形の沈刻が施されている。その意味は沼津b、細浦a例などの前部の抉りと同様であろう。千鳥久保、向油田、沼津b、南境b、細浦b例の頭頂部には、上から楕

II 有鉤短剣の分類

円錐形の孔が海綿体をえぐって頭部中央の円孔に達するまで穿たれている。別の何らかの物体を挿入するための工作のようにも思われるが、孔の形状・深さからすると、あまり大きな物が装着されたとは考えにくい。南境 d 例は、叉状部に面した側の緻密質だけでつくったもので、頭部の海綿質部分は除去されて断面 U 字形の溝となっている。また身の先端近くに膨みを設け、そこに 1 孔を穿っている。頭部から身の後面上半にかけての U 字溝は、南境 a、細浦 a 例にもみられる。青島例は、「側面観に於ては切り込みが無けれど、上面観に於ては縦の切り込みがあつて二又になつて居る」（松本 1930: 32）というから、南境 d 例とは異なるが、しかし一脈通ずるところがあるようにも思われる。また、南境 a 例は頭頂後半部から身後背部にかけて断面半円形に抉られており、南境 d 例と共通する。

身部は、いずれも全面丁寧に研磨されており、その大部分は断面円形で刃部をもっていない。千鳥久保、沼津 b 例などは全体に屈曲しており、しかも細いのできゃしゃな印象を与える。しかし、先端は尖っており、武器としての機能は一応そなえている。ただし、両側刃をもたないので厳密には剣とはいえないことを付記しておかなければならない。

そうした中であつて注目すべき遺品が、岩手・中沢浜 a 例である。身の先端を二又に加工して、そこに打製のおそらく柳葉形の硬質頁岩製尖頭器を箠めこみアスファルトで固定したもので、鳥形短剣の身の先端部に刺突の機能があることをもっとも雄弁に物語る資料である。

大きさは、千鳥久保例の復元長 26cm、沼津 b 例の長さ 25.8cm、南境 a 例 20.3cm、川下り例 15.6cm、細浦 a 例の復元長 8.4cm、千葉・大倉南例の復元長 6.9cm であつて、大小の差が著しい。中沢浜 a 例は鹿角部分の長さ 15.3cm、石製尖頭器をふくめた推定長は 20cm ほどであろうか。

なお、鳥を想わせる特徴は認められないが、上記と同様に逆自在鉤形で身が丸い断面をもつ例も、この類に含める。細浦 b 例は、ほぼ同じ長さの第 3・第 4 枝の叉状部の前部から後部へ貫通孔が穿たれ、さらに頂部からも浅い凹みが設けられている。福岡・山鹿例は 2 点とも同形同大で、第 1 枝以下を切断した角幹と第 3・第 4 枝を用い、逆 Y 字形に加工し、孔の位置は叉状部ではなく基部にある。しかし、孔は両側から穿とうとしているが、途中でやめている。また、角幹の切断部も切断後の仕上げ作業を行っていない。したがって、未成品であることは明らかであるが、この 2 点は、山鹿 2 号人骨の胸部におかれていた。

以上は、縄文中・後期に属する諸例であつて、その分布は典型的なものが東京・千

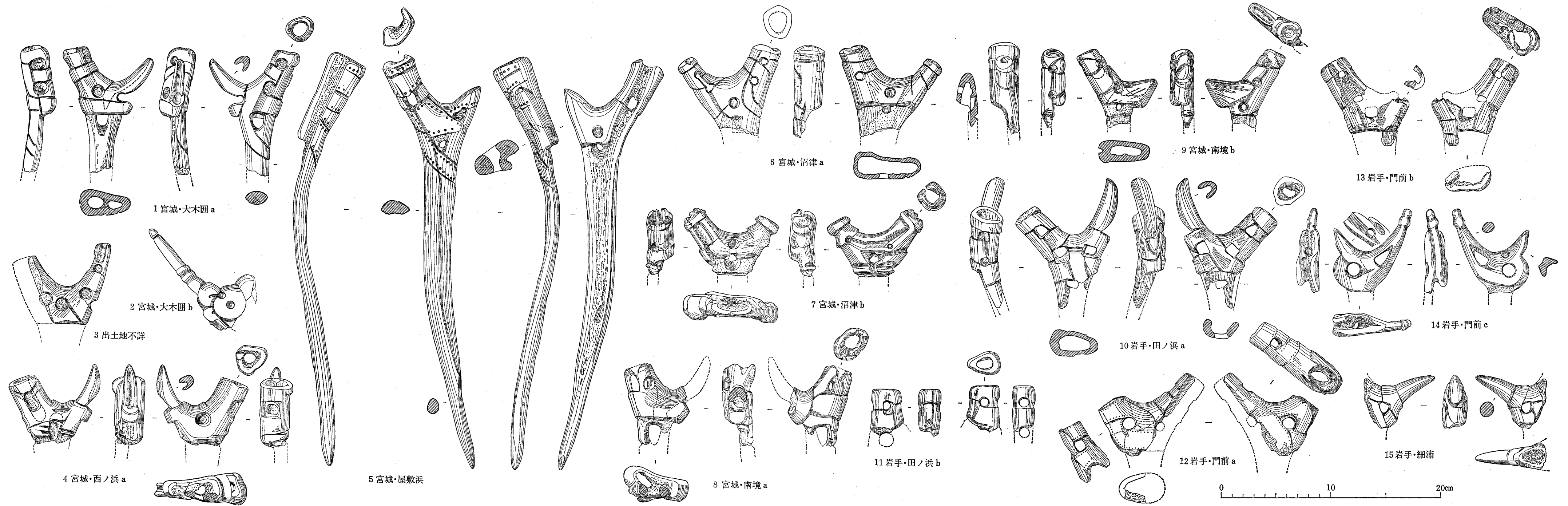


図 1 縄文中・後期の Y 形短剣（大木囲 b，出土地不詳は樋口 1955 原図）

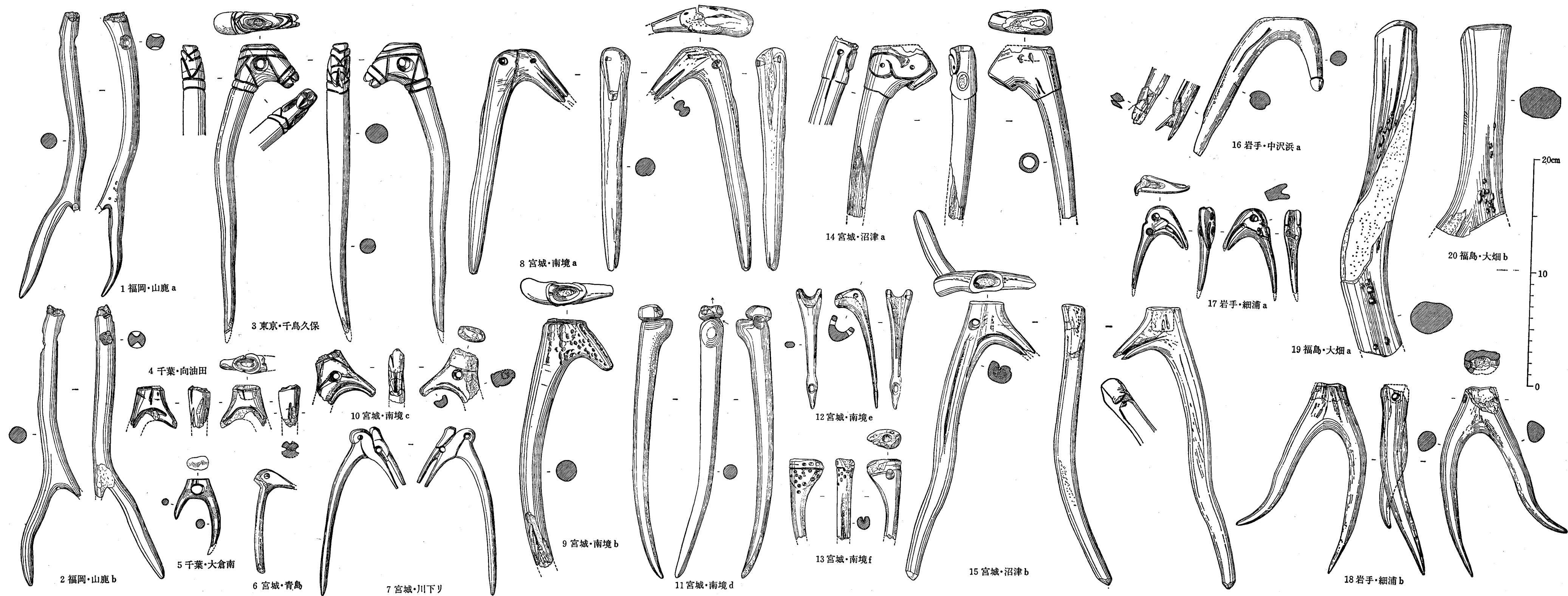


図 2 縄文中・後期の鳥形短剣

(山鹿 a・b は九大解剖学教室編 1972, 大畑 a・b は馬目編 1975 原図, 川下リ は松本 1930 a 写真, 青島 は松本 1930 b 写真を図化)

葉・宮城・岩手の諸県から出土し、これと関連をもつと推定される例が福岡県から出土していることになる。貝塚遺跡の多い千葉県からの出土例が少ないことから推定すると、この類も宮城・岩手の両県に分布の中心があると考えられる。

縄文晩期 この時期には、千葉・荒海、奈良・橿原 b・c 例のような以前とほとんど変らない型式も残存している。秋田・柏子所 b 例は身部先端にも基部の孔と直交方向に穿孔してあるという点では、南境 e 例の後裔とみなしうる。

その一方、基部に各種の文様を彫刻し、頭頂部の孔が顎部からの孔と連結する秋田・柏子所 a、奈良・橿原 a・b 例がある。岩手・中沢浜 b 例は、頭頂部の孔は前代と同様、途中で終わっているが、この類に含めてよいだろう。基部の文様は、三叉文と直・曲線文を組み合わせた柏子所 a 例、両端を巻きこんだ C 字形の沈刻に凹点 2 個を付加し、さらに頭端から身の上半部にいたるまで凹点を中心にその周囲に 4 個の三叉文を彫刻した文様を 6 段にわたって施した中沢浜 b 例、X 字形と口字形の沈刻を組み合わせた橿原 a 例となっている。

身部はいずれもよく研磨され、断面円形である。ただし、柏子所 a 例だけは、鹿角の叉状部側の緻密質だけでつくっているため、基部にくらべると身部が異常に細い。

愛知・吉胡 108 号例は、熟年男性人骨に伴出したもので腰飾として登録されているが、明らかにこの類に含まれる。これも小形品で、孔は基部の前部と後部の間を貫通している。鉤状突起の前面は抉って U 字形に加工してある。文様は片面に井形の沈刻がある。

なお、荒海例はともかく、他の諸例に関しては鳥形のイメージは出てこないといつてよい。にもかかわらず、これらをも鳥形短剣と分類するのは、それ以前の諸例との間に系譜関係を認めうるからである。

大きさは、中沢浜 b 例が推定 25cm 前後、橿原 a 例が 20cm 前後、橿原 b 例が 20.1cm の長さをもち大形の部類にはいる。それに対して、柏子所 a 例は 11.5cm、橿原 c 例は推定 15cm 位だが身は細くきゃしゃ、吉胡 108 号例は 9.1cm で、小形である。

晩期例の分布は、秋田・岩手・千葉・愛知・奈良の 5 県であって、愛知・奈良の両県ではこの時期に東北・関東地方と共通する特殊な角製品が存在していたことが知られるわけである。

弥生前・中期 角座に始まる角幹部と第 1 枝を縦に半截して、ほとんど緻密質だけを用いて、身を断面紡錘形の両刃で先端が尖るように研磨してつくった鋭利な、まさに短剣である。第 1 枝は、基部近くの身から直角に突出する鉤状に加工してあり、有鉤短剣の名称にもっともふさわしい形状をもっている。

II 有鉤短剣の分類

初めて学界に報告されたのは奈良・唐古 a・b の 2 例であったが、これらは、武器の機能をもっているとは到底考えられない一方、文様彫刻があったために「鹿角製垂飾」とされた（小林 1943：213～214）。ところが、その後に発見された滋賀・入江 a～d の 4 例はいずれも身部に同じ手法で刃をつけてあったので、「短剣形鹿角製品」（佐原 1960：105）、「ヒ首か長い柄をつけた勾兵（戈か）」（坪井 1960：75）、あるいは「鹿角製戈」（丸山 1973）と考えられるようになった。しかし、最近では、愛知・朝日例はふたたび「垂飾」として記載されている（中川 1982：82）。

なお、大阪・池上例は木製品（樹種はサカキ）で、「短い樹幹を〈掇〉に、樹枝を〈内〉に当てた」「戈の模造品」として報告された（小野・奥野 1978：65）。また、山口・宮ヶ久保例（広葉樹の幹枝製）は「木製戟形祭器」として紹介されたが（中村 1977：160～162）、これらは明らかに上記の角製品を木に替えたものである。

唐古 a 例は、鹿角の角座および第 1 枝をそのまま利用し角幹の先端を尖らせあるいは丸く加工していたと推定されるものである。角幹の途中に両端の丸い長方形 2 個によって各段を構成する簡単な流水文を浮彫している。角幹は全面研磨してあるが、不整形の断面をのこしている点が他と異なる。角座も自然形をとどめたままで、第 1 枝の下方に上下両側から穿孔して、垂下用の紐孔としている。

唐古 b 例は、小形の鹿角基部を縦に割って扁平な形にし、角幹部の先は丸くなっている。また、角幹部の両側縁も薄くはなっているが、刃といえるほどの鋭さはまったくもっていない。角座の部分には 2 箇所円孔を穿った形跡がのこされているが、どちらも孔の半分をのこして欠損し、しかも欠損部は磨滅または研磨して丸くなっている。孔が失われたのちも、角座の隆起を利用して紐がかけられていたと考えてよいだろう。その点を参考にすれば、角幹部の先端も元々は尖っていた可能性がある。表面には鋸歯文と平行短線等が施されている。なお、裏面には角幹部の主軸に直交して 3 箇所段落の部分があり、しかもその周辺部は滑面を呈する事実が注意される。あるいは、この身部が他の何物かに緊縛された時の紐ずれと関連するのであろうか。

朝日例と入江 a・b・c・d 例の 5 点は、同巧同大といってよいもので、鹿角の角座に始まる主幹部と第一枝を縦に半截し、緻密質の部分を主材として角幹部の両側に鋭い刃をつけ、先端部を鋭く尖らせた短剣形を呈している。身の側面形もほぼ一直線できわめて鋭利に作られている。第 1 枝の突起部は断面不整形楕円形で刃をもたず、先端には瘤状の突起——入江 a・c は一見男根を連想させる——を設けたり、途中に帯状の隆起帯をめぐらせている。朝日例は、前者の退化形態とみてよいだろう（時期的には逆転するが）。角座の部分は、楕円形に整形し、片方に寄った位置から斜めに穿

孔し、その孔は角幹の正面上端に顔を出している。

長さは、入江例が23.3～26.7cm、唐古b例が12.2cmである。

木製品のほうは、池上例は断面円形の鉤状突起と鈍い両刃の身部とは約50度の角度で交わり、基部端には瘤状隆起を付している。穿孔はないが、くびれ部を利用すれば、紐をくくりつけることは容易である。全面削って仕上げてある。推定長22cmで入江例に近い。宮ヶ久保例は、全体の大きさの割に身の幅、突起の幅が広い。身は鋭い両刃の剣状に仕上げてある一方、突起は扁円形の断面をもっているが、先端は欠損している。基部両側縁にはV字形の切りこみをそれぞれ5～6個いれてある。紐の滑り止め用であろうか。全長28.6cm。

以上すべて弥生時代に属し、唐古・朝日例は前期、入江・池上例は中期初頭、宮ヶ久保例は中期中葉の所産である。

これらは、所属時期と形態が一見、銅戈に類似していることから、「鹿角製戈」ともみなされている。しかし、これを戈として木柄に装着しようとする、基部の角座の張り出しと第1枝先端の膨隆が邪魔となる。また、戈の内に相当する部分には着柄のための特別な加工はまったく行われていない。要するに、基部には着柄用の工作がなされていない一方、紐を通すための1孔が穿たれている。これらの事実は、この角製品が紐を付けただけで単独に用いられた武器すなわち鉤をもった短剣であったことをつよく示唆している。唐古b例だけは、身を何かにしばりつけたようにも看取されるが、基部の欠損・磨滅を考慮するならば、それも二次的な使用法であった疑いもたれる。

C 角製棒状短剣

鹿角の角幹部だけを用い、先端を尖らせた身部をもつ断面円形の棒状品で、鉤状の突起はもっていない。

基部には、福島・大畑a・b例と出土地不明例は円孔をもち、千葉・荒海a・b・c例は1側に方形の抉りを入れている。紐通しまたは紐掛け用とみてよいだろう。この抉りをもたない荒海f例と埼玉・真福寺の2例は、代わりに基部端を1周する沈刻をもっている。荒海の6例はすべて基部と身部との境界に浮線網状文が彫刻されている。荒海a例は、基部端にも2個の突起が耳状に付けられている。

身部は、荒海a例だけは研磨が不十分で結節がのこっているが、他はきれいに磨かれている。唯一の完形品である荒海c例の先端は、鋭く尖っており、武器の機能を十分にもっている。これも厳密な意味では剣とはいえないことは勿論である。

II 有鉤短剣の分類

大きさは、完形の荒海 c 例は25.5cm、先端を欠失した荒海 a・b 例は30cm前後の長さをもつと推定される。出土地不明例は、28.4cmの長いものである。大畑 a・b 例は16cm前後の小形品である。

さて、この鉤状突起をもたない角製品を「有鉤」のなかに含めてよいかは、問題になるところであろう。しかし、基部と身部の境に文様帯を設ける点は、有鉤短剣のうちに含めた唐古 a 例と通ずるところがある。また、断面円形で先端が尖った棒状品という点も、鳥形短剣の一部と共通する。さらに、見方によっては、屈曲した全体の形が鉤形を呈しているともいえる。ここでは、あえて有鉤短剣の範疇に入れておくことにしたい。

分布は福島・千葉・埼玉の3県で知られているだけであるが、出土地不明例はおそらく宮城県または岩手県であろう。時期は大畑例が縄文後期初頭、荒海例が晩期末、他も縄文晩期である。

2 骨・角・牙製腰飾

A 角製Y形腰飾

鹿角の叉状部だけを利用して、Y字形に加工し、第1枝を鉤状突起にしたもので、身部をもたない。角幹部の海綿質を抉りにとって他の何物かを嵌入あるいは接着できるように細工されている。Y形短剣の基部の部分品と考えるとよいだろう。ただし、なかには身部の装着を放棄して、それだけで使用されていると考えられるものが含まれている。

縄文中・後期 宮城・南境 a は、Y形短剣の南境 a・沼津 a 例などの基部とまったく変るところはない。第3枝と角幹の切断部は最終の折り取った跡をそのままのこしており、未成品の可能性はある。基部と身部の境の両側縁には小さな抉りをいれている。緊縛用と考えるか失敗と考えるか、判断は難しい。

南境 b は、表裏にY形短剣と共通する皮革帯を編み巻きしたような浮彫りが施されている。片面下部には茎状の突出部があり、その中央には1個の円孔が穿たれている。鉤状突起に相当する部分の末端は海綿質が抉りとられて楕円形の孔になっている。

南境 c は、表裏同形で、角幹部下端は海綿質が除去されて深い孔になっている。第1枝の鉤状突起の先端は丸く整形して1孔を穿ち、また途中に細長い三角形の透孔をあけている。片面には幅せまい帯を縦横に浮彫りし、その上に列点文を施している。反対面には帯の表現はなく弧形の透孔があけてあるだけである。

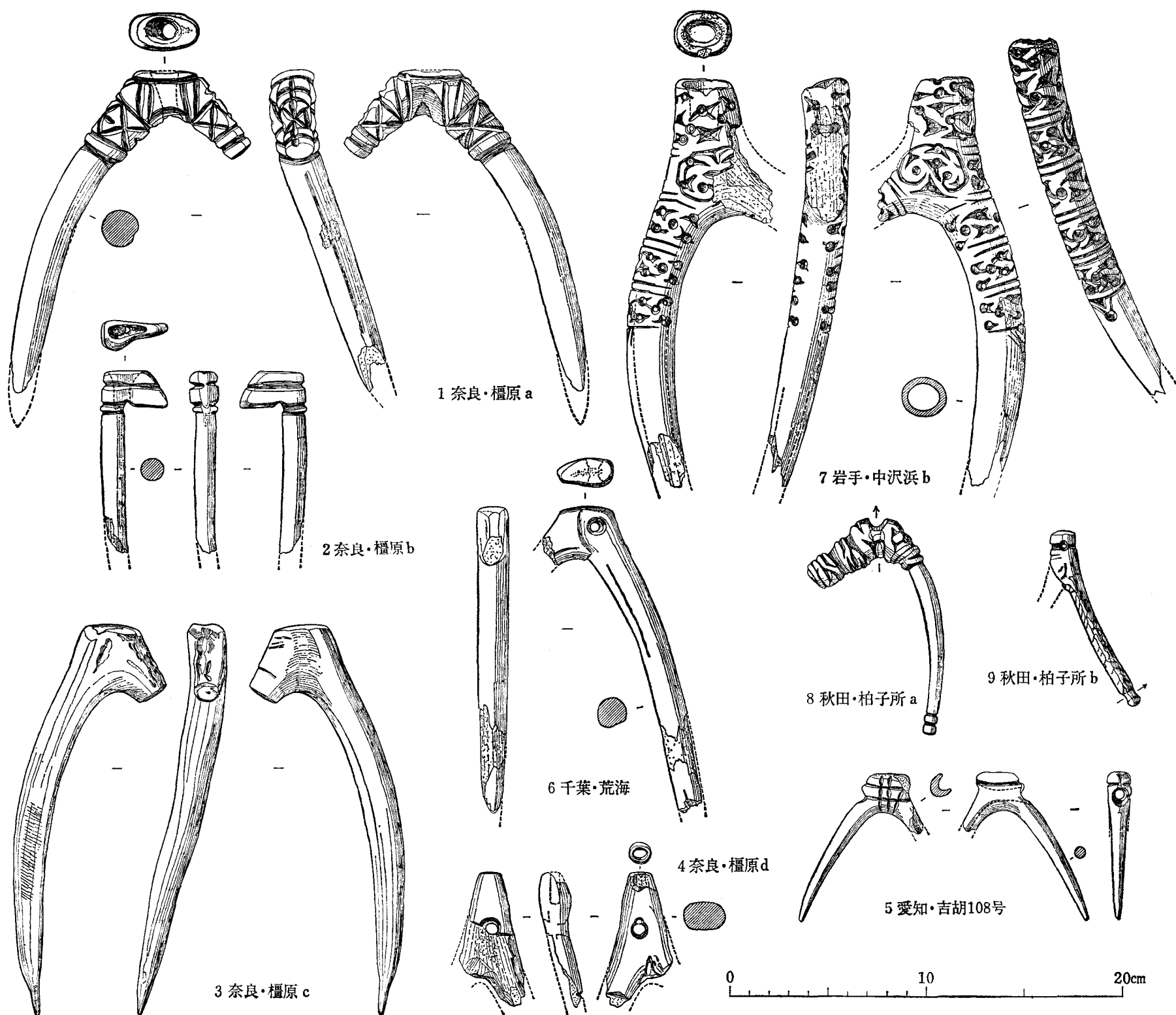


図 3 縄文晩期の鳥形短剣（柏子所 a・b は大和久編 1966 原図）

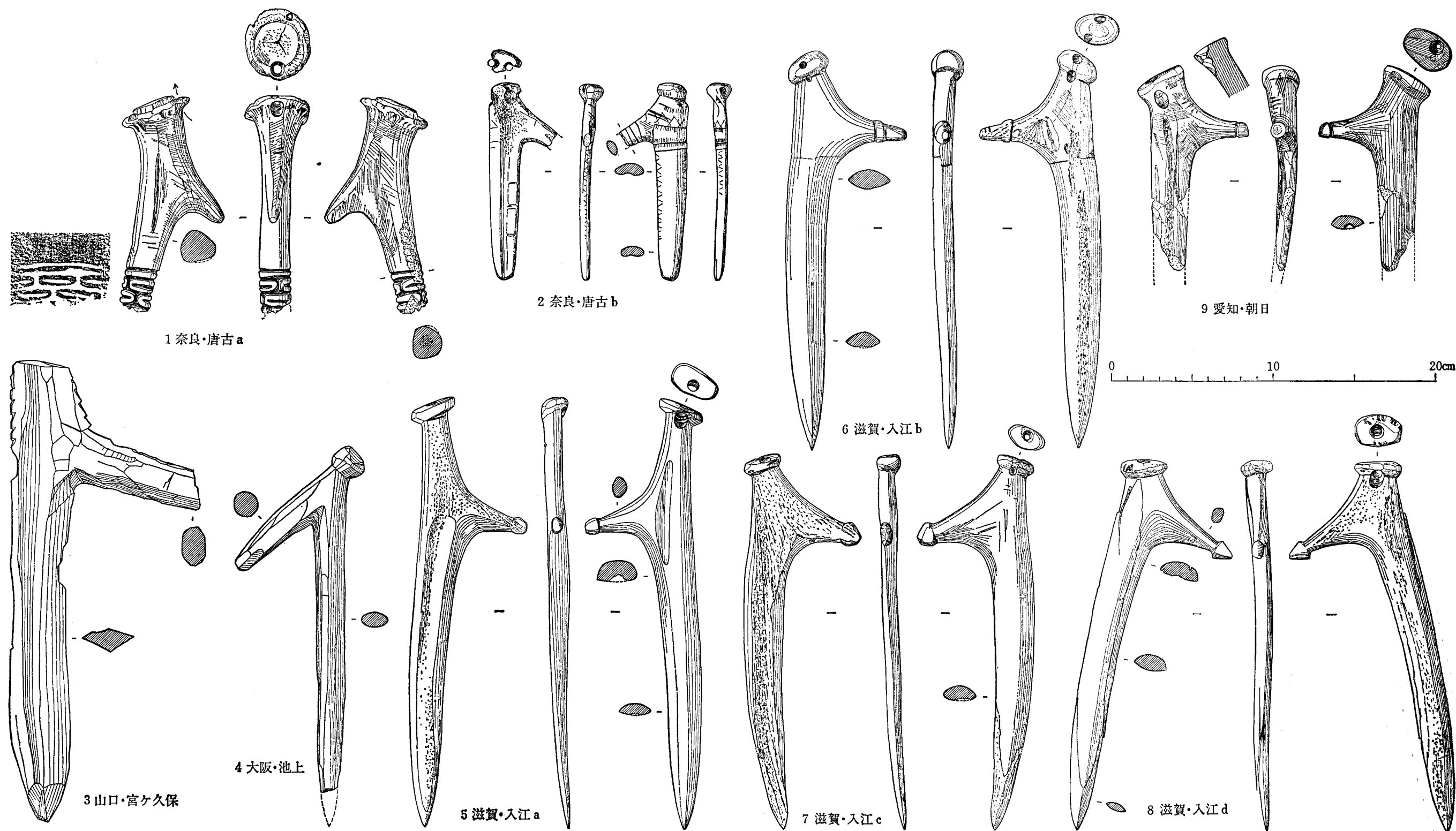


図 4 弥生前・中期の角製・木製有鉤短剣（宮ヶ久保は中村 1977，池上は小野・奥野 1978 原図）

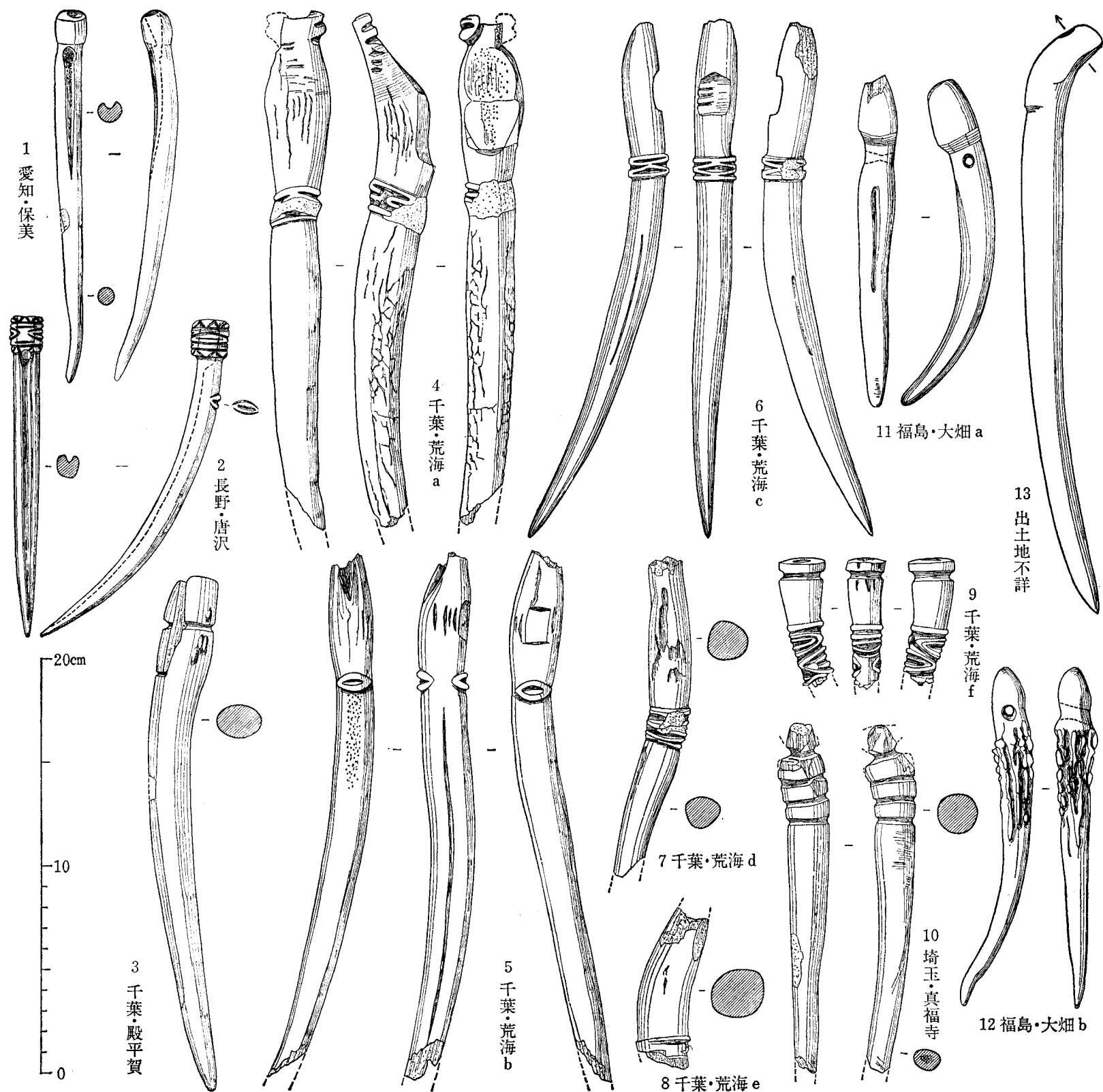


図 5 縄文後・晩期の棒状短剣

(保美は紅村 1963 原図，唐沢は永峯・樋口 1967 原図，殿平賀は村上 1967 原図，荒海 a～f は西村 1984，大畑 a・b は馬目編 1975，出土地不詳は樋口 1940 原図)

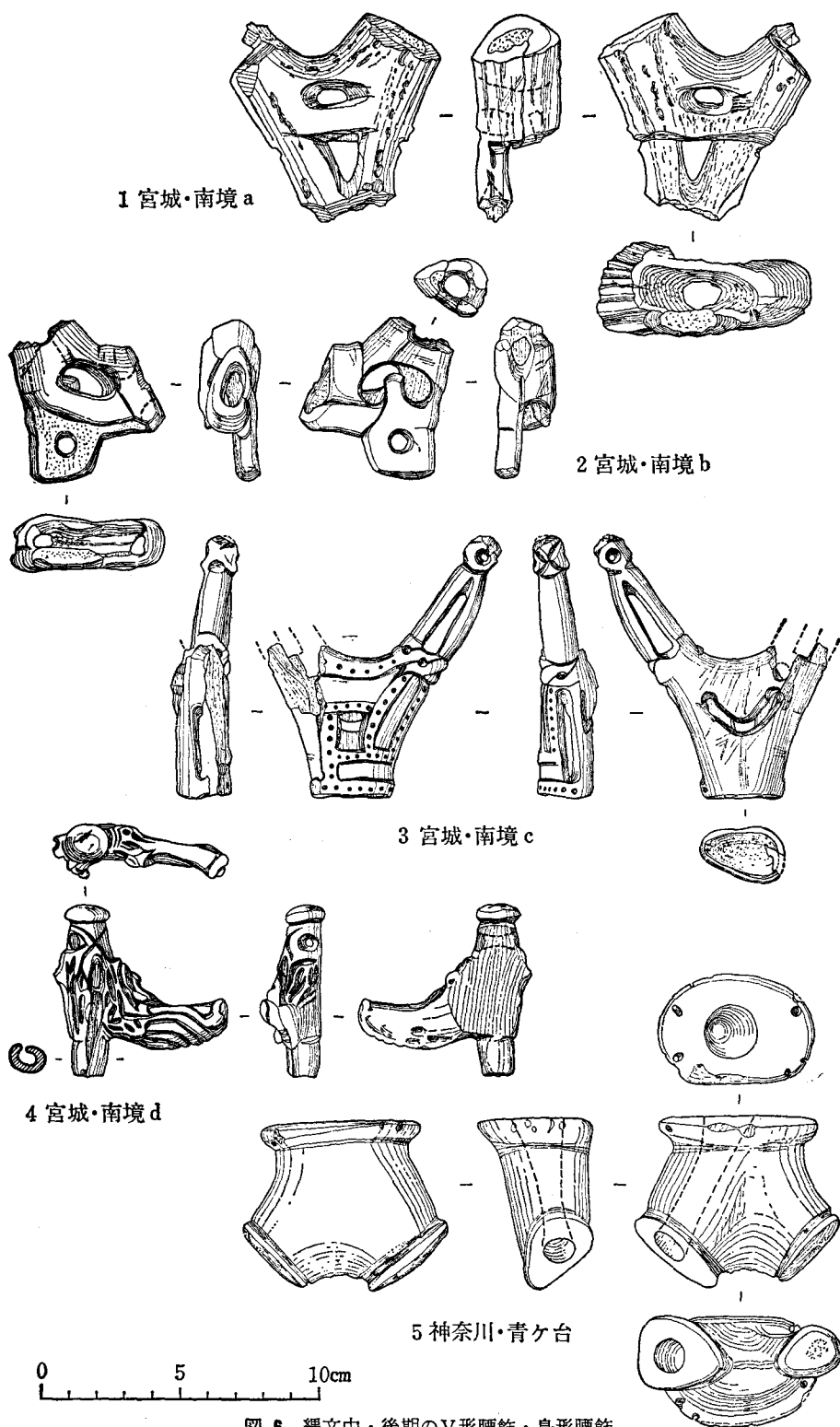


図 6 縄文中・後期のV形腰飾・鳥形腰飾

II 有鉤短剣の分類

南境 d は、以上と趣きを異にし、角幹部下端が茎状に加工されている。おそらく身部のほうに柄孔があけてあり、そこに挿入するのであろう。片面には波状文が浮彫りされているが、反対面は無文で、表裏の区別は明瞭である。頭部には 1 孔がある。

この時期に属する資料は、宮城県南境例だけであるから、現状では Y 形短剣の分布範囲内の一部にのみ存在することになる。

縄文晚期 角幹とある分岐部の一部を利用して作ったもので、ヴァリエティに富んでいる。以下、a～e の 5 類に分けて記述する。

a 角幹とおそらく第 3 枝または第 4 枝の分岐部を利用したと考えられるもので、全形はと字形またはコ字形を呈する。角幹部を頭部と基部にあて、枝を鉤状突起または屈曲部にあてている。頭部には両側から円孔をあけた紐孔があり、基部には下方から海綿質を削りとった楕円形ないし水滴形のやや大きな孔をあけた環状部がついている。後者の孔は身部の一部まで延長されそこでは溝をつくっている。頭部は、沈線をいれて装飾したうえにさらに上方へも延びる突起をもつもの（愛知・吉胡 85 号例）、大小 2 孔を穿ち、上部に突起をもつもの（吉胡 106 号例）、孔に両面とも 2 個所の刻みをいれたもの（吉胡 232 号例）などがあるが、大部分は四～五角形の単純な形状に 1 孔をもつだけである。基部の環状部は、さらに下方に向って突起をもつもの（吉胡 85 号、同 104 号、同 106 号、同・中山 25 号、岡山・津雲・清野 3 号、同・長谷部 17 号例）があり、それをもたないものは退化形態とみうる。環状部は、身から隆起し、帯を巻いたような状態を表現した例もある（吉胡 106 号、津雲・長谷部 8 号、同・17 号例）。

突起は、長い鉤状のもの（吉胡 85 号、106 号、津雲・長谷部 17 号例）から単なる直角の屈折部になったもの（吉胡 92 号、同 120 号）およびその中間の諸段階のものがある。なお、突起を丸い瘤状に変形したもの（吉胡 115 号、津雲・長谷部 8 号例）、突起をつくったうえで先端に瘤をつけたもの（津雲・長谷部 17 号）がある。後者は、弥生時代前・中期の鳥形短剣（愛知・朝日、滋賀・入江 a・c 例）の鉤状突起に酷似する。また、津雲・清野 3 号例は屈折部に米字状の沈刻を、基部の環状部には川字状の沈刻を施している。

b 角座から第 1 枝の分岐部付近を利用して作ったもので、角座の海綿質をボウル状に抉りとって下方から斜め側方へ抜ける孔をもっている。いずれも基部の孔と直交方向の紐孔を側方にあけている。基部の孔は、a 類の環状部に相当するが、他の硬い物体を装着できるようには思えない。

吉胡 251 号例は、幹枝は上からみると逆 S 字形に加工してあり、表裏対称形となっている。基部の周囲には紡錘形の浮彫りが並列してある。全面赤色に塗彩されている。

岡山・中津6号例は、第1枝を鉤状に突出させ、頭部にも上方と前方への小さな突起がつけてある点は、a類の吉胡85号例との関連を想わせる。全面磨滅しているが、特に紐孔の一部の磨滅は著しい。

津雲・清野53号例は、全体形がかつて「鶏頭形」と表現されたように、まことに奇妙な形である。

津雲・大串例は、2破片が接合して1個体になると思われるが、現状では接合部分をもたず、また記録が一切存在しないので、この点是不確実である。沈刻で飾った頭部に腕状の部分がとりついている。

c 角座から第1枝の分岐部付近までを利用して作ったもので、紐孔の位置は角座の縁辺に移り、その表裏を貫通している。孔の大きさはぐっと小さくなっている。角座の海綿質は十分に抉りとり空洞にしているが、特に何かを挿入するためとは考えられない。また、幹枝の先端部は逆に海綿質が詰ったままとなっている。したがって、c類は角座が上になるようにして単独で垂下・使用したと考えられる。吉胡103号、同238号、伊川津1984-1号例のばあいはいずれも、紐孔の壊れた個所が2箇所あり、何回もあけ直したことがわかる。吉胡238号例は、表裏とも2横線間にX字文を沈刻している。

d 角幹と枝の分岐部を利用して全体をへ字形に加工したもので、分岐部の中央に表裏から孔を穿っている。枝を鉤状突起に加工し、角幹には前後方向にもう1孔をあけている。この孔の周囲は磨滅が特に進んでいたり（吉胡130号例）、壊れている（吉胡159号、同293号、同300号例）から、紐孔はこちらであった可能性がある。この孔自体は、a類の環状部に相当するから、本来の目的から外れた使用法に変化していることになる。d類も単独で用いられたことは明らかである。吉胡130号例は鉤状突起の先端を小さな瘤状に加工し、同159号例は途中に瘤をつけている。同298号、同300号では浅い沈線によりやはり痕跡的ながら瘤を作りだしている。

なお、愛知・雷1号例は、中央に大きな円孔をもつ隅丸方形の本体に2個の突起をつけ、一方は本体の孔と直交方向の孔を穿ち、他方は先端近くに1条の隆帯をめぐらせた鉤状突起としている。

また、大阪・国府・浜田3号例は、環状部からハ字形に突起をつけている。両突起とも基部に接する部分に1条の隆帯をめぐらせ、完存している一方の突起の先端は瘤状にふくらませている。

以上の雷・国府の両例は、吉胡出土のd類とは趣きを異にするが、とりあえずこの類のうちにいれておきたい。

II 有鉤短剣の分類

e 福島・真石例（西村 1943 : 59）が唯一の資料である。Y字形で、茎部に海綿質をくり抜いた下からの大きな孔があけてある。茎部表面には2条の平行沈線がめぐっている。真っ直ぐで細いほうの枝の先端には3条の沈線をめぐらせ、太いほうの枝の先端はいったん丸い瘤をつくりその先に茎部と直交方向の1条の沈線をめぐらせておわる。前者が鉤状突起、後者が紐孔の代わりになっているのであろうか。茎部には、他のV形腰飾の多くと同様、何らかの棒状物が嵌入されたと考えて間違いないだろう。

以上、晩期のV形腰飾をa～e類に分類して概説したが、その分布と細かな時期について付言しておきたい。a類は、愛知県の吉胡・伊川津・稲荷山の3遺跡から計14例、岡山県の津雲遺跡から4例出土しているが、愛知県吉胡遺跡出土の12点が傑出している。時期はいずれも晩期ということしかわからない。

b類は、愛知県吉胡遺跡1点、岡山県中津・津雲の2遺跡から3点出土している。中津例は、周辺出土の土器片は黒土B1式であるので、晩期中葉ないしそれ以降ということになる。

c類は、愛知県吉胡遺跡から3点、伊川津遺跡から1点出土をみている。

d類は、愛知県吉胡遺跡から4点、同県雷遺跡から1点、大阪府国府遺跡から1点出土している。

e類は、福島県真石遺跡から1点出土しているだけで、大洞 C₂ 式土器と共存したという。

このように、V形腰飾は、愛知県下の諸遺跡から大量に検出され、岡山県下からもやや多く出土している。しかし、東日本ではそれらと系譜を異にするとみられるものが福島県から1点出土しているだけである。したがって、V形腰飾の晩期における発達の中心が、愛知県から岡山県にかけての東海西部・近畿・中国地方であったことは確実である。

B 角製鳥形腰飾

縄文後期 神奈川・青ヶ台例が唯一例で、これは、角座と叉状部だけを用い、第1枝も大半を切り落としており、鉤状突起は根元をもつだけである。一方、角幹も叉状部で切断して、その切断面から角座中央とをつなぐ斜め方向のあまり大きくない孔をあけている。孔は角座側が大きい。角座はよく磨って薄くしている。全体の形状は、鳥形短剣の沼津 a 例の基部にきわめてよく似ており、円孔に身の茎を挿入するならば、その姿はこのようなものであったかと思われる。

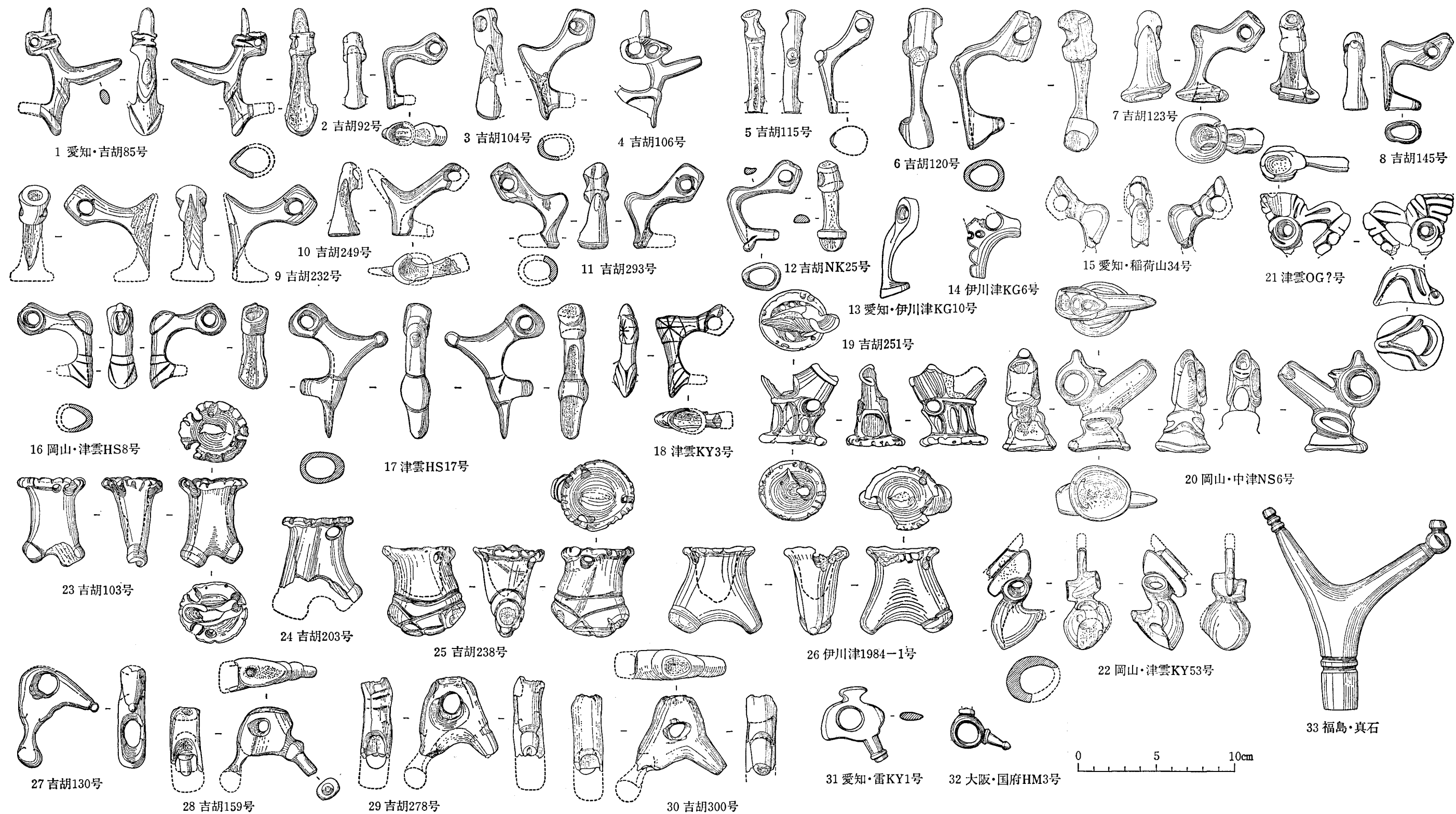


図 7 縄文晩期のV形腰飾

(吉胡 106 号・203 号は清野 1949 写真を図化, 伊川津 6 号・10 号は小金井 1928, 雷は清野 1969 原図, 真石は西村 1943 写真を図化)

縄文晩期 鹿角の叉状部と第1枝を利用したと考えられるもので、全形は鳥形というよりも、横し字形といったほうがわかりやすい。すべて鹿角の分岐部の緻密質部分だけでつくられている。

身の垂直の受部に、やや下向きの棒状の突起がつく。この受部は、分岐部側だけの半分を利用し、海綿質を除いて断面U字形にし、内外面を貫く小孔を穿ったもの（岩手・獺沢，宮城・里浜b・c，福島・寺脇例），鉤状突起の付根に近い位置にやはり海綿質をくり抜いた環状部を作り出したもの（山形・蟹沢，宮城・里浜a，山王，愛

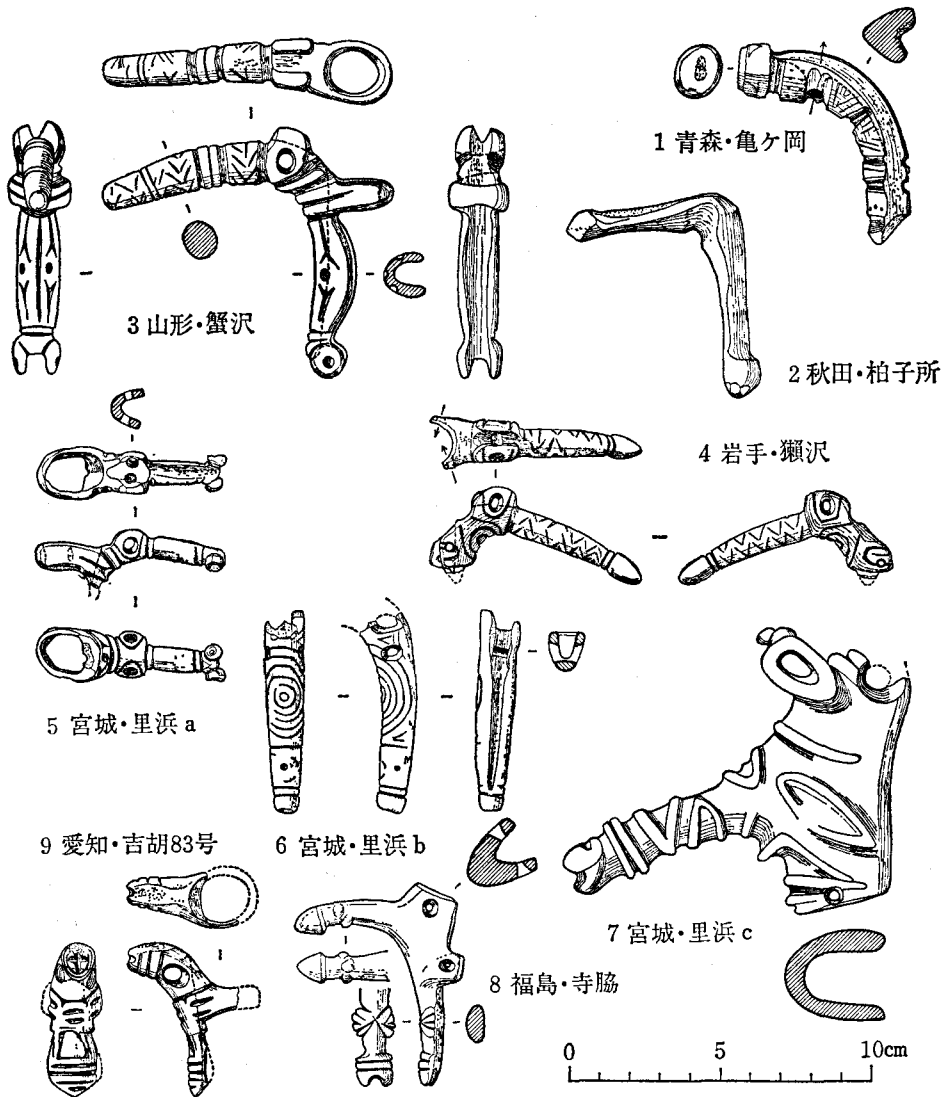


図 8 縄文晩期の鳥形腰飾

（柏子所は大和久編 1966，里浜 a・b は東北歴史資料館原図，里浜 c は樋口 1940，寺脇は江坂・渡辺 1968 原図）

II 有鉤短剣の分類

知・吉胡83号例)がある。扁円形の環状部に何らかの棒状物が通され、その物は受部のU字形の凹みにも密着・固定されたと推定してよいだろう。受部の小孔も、その棒状物を緊縛するための紐孔か、そうでなければ目釘孔なのであろう。なお、青森・亀ヶ岡例のばあいには、むしろ鉤状突起の根元付近に前面から後面へ通ずるやや大きな孔があけてあり、その孔を目釘孔として用いたように看取される。

受部は、玉抱き三叉文(蟹沢例)、重圈文(里浜b例)などを施してある。

鉤状突起は、細長い円棒状で、複線山形文(蟹沢、瀬沢例)や紡錘形浮文(里浜c例)で飾ったもの、円棒の先端左右に耳状の突起を付したもの(里浜a)、短い円棒で沈線3本を半周させ、先端に十字形の刻線をいれたもの(吉胡83号例)などがある。

分布は、青森、秋田、岩手、宮城、福島 of 東北地方5県と愛知の東海地方1県であって、愛知・吉胡83号例だけが東北地方から飛び離れた状態を示している。この事実から、晩期の鳥形腰飾も、東北地方に分布の中心があり、例外的な吉胡例は東日本の影響下に製作されたか、そうでなければ製品そのものの搬入(着装者の移住に伴った可能性もあろう)と考えるべきであろう。これらのことは、晩期に属するV形腰飾が東北地方からはほとんど出土していない現状とあいまって、東日本では鳥形短剣に起源をもつ鳥形腰飾が発達したのに対して、西日本ではY形短剣に由来するV形腰飾が盛行したことを指し示しているのである。Y形短剣も鳥形短剣も発生地は東北地方の三陸海岸から仙台湾周辺の可能性がつよいと考えられるから、この現象はきわめて興味深いことといわなければならない。

C C形腰飾

鉤状突起の存在は顕著でないか、またはそれを全く欠いているが、全体の形状が鉤形ないしC形を呈するものである。素材は、猪牙、獣骨、鹿角である。

a 猪牙(愛知・吉胡271号、愛知・伊川津例)または獣骨(大阪・国府・清野3号例)を用いたもので、基部に大小の2孔があけてあるが、小孔は基部端に位置している。猪牙製品には身の側縁に左右の位置をずらせて二つ山の小突起がつけてある。

b 獣類の第1頸椎を素材にし、椎孔の内側の突出部を削って孔を拡大する一方、環椎翼の片方を除去しもう片方に1孔をうがち、あわせて直交方向の大小2孔をもっている。おそらく小孔は紐孔であろう。愛知・吉胡94号例は犬、同143号例は狐の第1頸椎である。なお、大阪・国府・小金井6号例(小金井1923:41)は、「牙(或は角)製かと思はれるもの」で、中央に大きく両端に小さい計3孔をもつ扁平な板状品である。穿孔は同方向であるが、この種に含めておきたい。

c 鹿角の角枝を縦に半截して利用したもので、全体は弓形である。海绵体は完全に除去してあり、断面U字形を呈する。基部には紐通しの孔があけてある。愛知・吉胡128号例が唯一例である。

以上のC形腰飾a～c類は、管見では愛知、大阪の2府県の縄文晩期に属する3遺跡からの出土例だけであるが、林謙作氏の教示によれば、a・bとも宮城県には類例があるという。

D 角製円筒形腰飾

鹿角製の円筒形の小品である。長さ2.9～3.5cm。

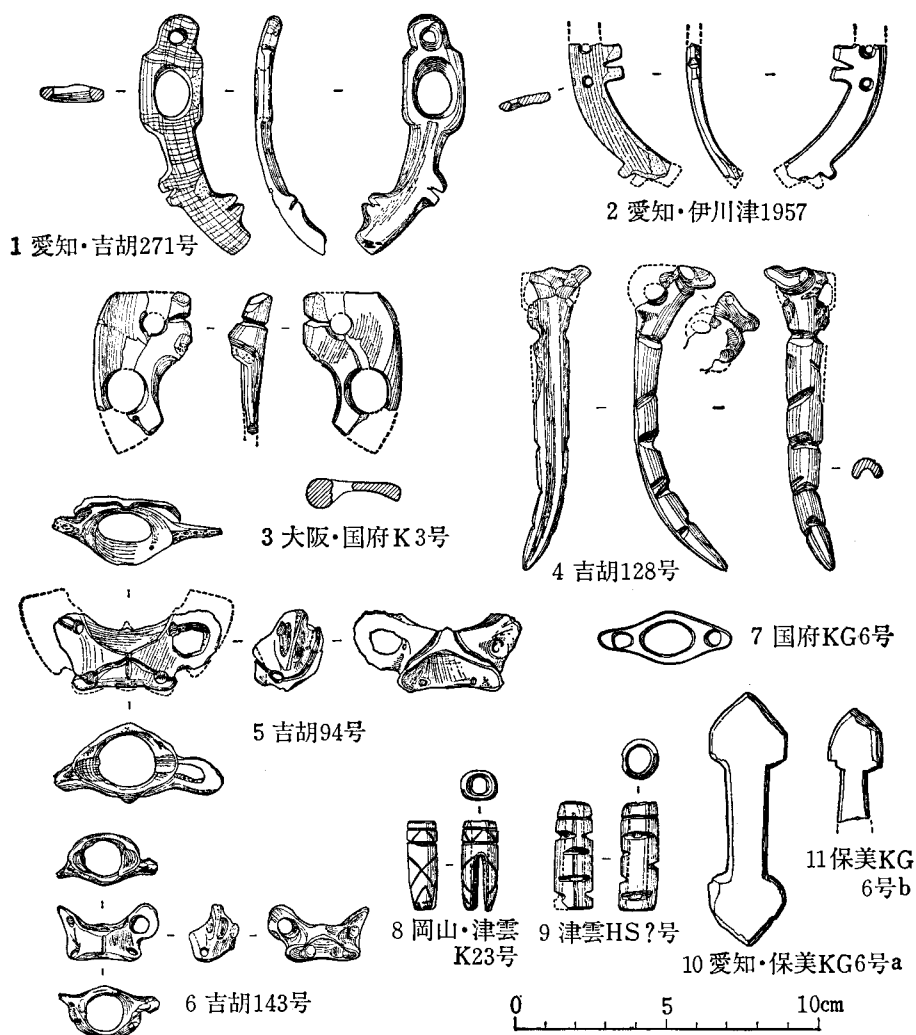


図9 縄文晩期のC形・円筒形・両頭腰飾（保美a・bは大山1923写真を図化）

II 有鉤短剣の分類

岡山・津雲・清野23号例は、下端からの深い切り込みがあり、表面には鋸齒文の線刻がある。津雲・長谷部（?号）例は、側縁の四方に長軸に直交する短線を沈刻してある。ともに棒状物の基部に装着されたと考えられる。

以上の縄文晩期の2点がすべてである。ただし、宮城・沼津、茨城・福田、千葉・余山出土の「垂飾（管玉）」（樋口 1940：95～96）は、これと同類の可能性はある。

E 骨製両頭腰飾

愛知・保美6号例（小金井 1923：42）は、「大獣骨の海绵質を以て作ったトランプのスピードを二つ茎を以て継ぎ合わせた様な形の扁平板である」。長さは8.5cmである。この近くから「同一物の中央にて折れた半分」がもう1点出土している。

以上の縄文晩期に属する2点が現在知られているすべてである。

F 角製Y形腰飾

角幹と第3・第4枝を利用してY字形に加工し、縁辺にとじつけ用の小孔をうがつた大形品で、文様は片面だけに華麗に施されている。

宮城・里浜a例は、畸形の鹿角の第3・第4・第5枝の部分を中心に利用してY字形に加工したもので、切断部分には小孔はあるが他の太い何物かを挿入するような穿孔はない。片面は丁寧に研磨して凹凸をなくしたうえで、両端が巻きこんだC字文のなかに2凹点を配した文様が沈刻してあるが、反対面は粗く削って平坦な面に仕上げてあるにすぎず、表裏の区別は明瞭である。注目すべきは、表側の縁または幹枝の切断面から裏側の縁に通ずる小さな円孔が4個所にわたって穿たれていることである。すでに指摘されているように、これが「何かを更に附けるかあるいは何かにこれを取りつけられる用意である」（樋口 1955：28～29）、あるいは「中側面を何かに接着して使った」（佐原 1979）ことは明らかであるが、裏面は平坦といっても全体に波を打っているので、実際には皮革や編布のような軟かい物体にとじつけるための孔であろうと推定される。4孔を結んだ線は逆台形をつくり、さらにその下部に文様とは関係のない粗い沈刻が施されているので、これも紐かけ用とすれば、紐は3段にかけてあることになろう。とじつけた状態を復元すると、図11のa bを結んだ線が上に、c dを結んだ線が下になるように装着されたのであろう。すなわち、2本の枝が下または斜め下に向かって突出するY字形にとりつけられたと考えられる。所属時期は、文様からすると、大洞B-C式ないしC₁式と推定される。

里浜b例は、鹿角を縦に半截して、ほとんど緻密質だけを用いて断面が扁平な楕円



図 10 縄文晩期の Y 形腰飾

形に仕上げている。やはり表裏の区別があり、表面に両端が巻きこむC字形文と三叉文が沈刻してある。穿孔は、基部と角幹の先端の2個所だけで、前者は表面から切断部へ抜け、後者は表面から裏面へ通じている。里浜aと同じくとりつけ用の孔とすれば、第3枝が下向きになるようにとりつけられたことになる。注目すべきは、第1枝の突出部が、文様は片側だけであるが、一見、鳥形腰飾の鉤状突起を想わせる点である。時期は、文様から前者と同様、大洞B-C式ないしC₁式と推定される。

宮城・二月田(樋口 1955: 32では七ヶ浜村見渡空墓と記載)例は、鹿角の表面全体を丁寧に研磨して断面隅丸長方形に仕上げている。やはり表裏ははっきりしている。表面には角幹から第4枝にかけては渦文を3単位沈刻してあるが、第3枝には裏面までめぐる2本の平行沈線とその間を充填する列点文を施しており、先端を丸く仕上げている点とあわせて、鉤状突起として明らかに他との区別がなされている。穿孔は基部左側と分岐部の2個所にあり、前者は側面と裏面からの孔が直角にぶつかって貫通している。2孔を利用して何物かにとりつけたばあいは、鉤状突起がやはり下にくる。時期は、大洞C₁~C₂式であろう。

以上にみてきたように、Y形腰飾はすべて、鉤状突起を下に向け、片面だけが人目にふれるようにして他の何物かにとりつけて使用する装飾品と考えられる。そして、里浜bや二月田例の鉤状突起を参考にするならば、それは腰飾との関連がつよく、腰巻にとりつけるために変化した腰飾ではないか、と私は想像する。

出土例は、最近出土の里浜c例を加えても、縄文晩期に位置する宮城県の2遺跡からの計4点にすぎない。

3 角製Y形把頭

角幹と第1枝のつくる叉状部を利用してY字形に加工したあと、基部端面に上向きの断面が紡錘形ないし扁円形の孔をあけ、また基部の中央下端近くに目釘孔と推定される1小孔を穿っている。

静岡・登呂a・b例は、同形・同大で、基部の縦孔の断面は角を落とした紡錘形で、目釘孔はaは片面のみ、bは両面にあけてある。両例とも、片面には両枝端と分岐部中央に縦に盲孔の列点文が施してあり、a例ではさらに第1枝の基部にも施してある。a例の角幹上部の反対面には、1本の突帯が浮彫りしてあり、その上下に計3個の貫通孔がある。角幹上部の海绵体は十分に除去してあるので他の何かを嵌入するが、第1枝のほうは細く浅いのでその可能性は少ない。b例は、裏面の角幹上端を段状に僅かにのこして緻密質の一部を削り落としている。海绵体部分にはやはり小

表1 有鉤短剣・腰飾・把頭出土遺跡一覧

	遺 跡	短 剣			腰 飾					把頭		時 期	備 考	保 管 ・ 所 蔵	文 献
		Y形	鳥形	棒状	V形	鳥形	C形	円筒	両頭	Y形	Y形				
1	青森県西津軽郡木造町・亀ヶ岡					1						J・晩	漆塗り 行方不明 3	東京国立博物館	大和久 1966 東根市文化財 調査委編 1978
2	秋田県能代市・柏子所		2			1						J・晩			
3	山形県東根市・蟹沢					1						J・晩			
4	岩手県大船渡市赤崎町・蛸ノ浦		1									J・中末	異形, 多孔	早大教育考古資料室 岩手県立博物館	
5	岩手県大船渡市末崎町・細浦上ノ山	1	2									J・後前～ 中			
6	岩手県陸前高田市小友町・門前		3									J・後初			
7	岩手県陸前高田市小友町・獺沢					1						J・晩	異形	天理参考館 陸前高田市博	長谷部 1924, 樋口 1955, 吉田 1960
8	岩手県陸前高田市広田町・大陽台		1									J・中末 (大木 8 b)			
9	岩手県陸前高田市広田町・中沢浜		2									J・中末, 晩			
10	岩手県下閉伊郡山田町・田ノ浜		2									J・後初 (門前)			
11	宮城県栗原郡一迫町真坂・山王					1						J・晩			
12	宮城県登米郡南方町・青島		1									J・中末 (大木 9・10)	東北大地質古生物	松本 1930 b	
13	宮城県桃生郡小野村・川下り響		1									J・中末 (大木 9・10)			
14	宮城県桃生郡鳴瀬町・里浜					3				3		J・晩 (大洞 B-C ～C ₂)			
15	宮城県石巻市・南境	2	5		4							J・中末 (大木 9・10)	楠本政助, 後藤勝彦	楠本 1973, 後藤 1968, 後藤・斎藤 1969	

16	宮城県石巻市・沼津	2	2							J・後		毛利伸, 東北大考古, 東北歴史館 佐々木富夫	樋口 1955
17	宮城県石巻市渡波・屋敷浜	1								J・中末 (大木10)	他に異形1		
18	宮城県宮城郡松島町・西ノ浜	1	2							J・後 (堀之内)		後藤勝彦, 加藤孝	加藤 1968
19	宮城県宮城郡七ヶ浜町東宮浜・大木岡	2								J・中	行方不明1	毛利伸	樋口 1955
20	宮城県宮城郡七ヶ浜町・二月田							1		J・晩		毛利伸	樋口 1955
21	福島県相馬郡新地町・三貫地									J・晩	腰飾1, 22号人骨 焼失		鈴木 1958
22	福島県いわき市南富岡・真石				1					J・晩 (大洞C ₂)			西村 1943
23	福島県いわき市古湊・寺脇					1				J・晩中 (大洞C ₂)		慶大考古学研究室	江坂・渡辺 1968
24	福島県いわき市泉町下川・大畑		2	2						J・中前 (大木7b), 後初	保存状態 不良		馬目編 1975
25	千葉県佐原市大倉・大倉南		1							J・後		早大教育考古資料	西村・金子 1956,
26	千葉県香取郡八都村・向油田		1							J・中前 (阿玉台)	他に腰飾状 1	早大教育考古資料	西村 1984
27	千葉県成田市根田・荒海		1	6						J・晩末 (荒海)		早大教育考古資料	西村 1952・ 1984
28	千葉県千葉市桜木町・加曾利									J	腰飾1, 小 金井発見		西村 1961・ 1965・1984
29	東京都大田区南久が原・千鳥久保		1							J・中?		菊池義次	清野 1949
30	埼玉県岩槻市柏崎・真福寺			1						J・後~晩		国大考古学資料館	菊池 1957
31	神奈川県横浜市金沢区釜利谷町・青ヶ台					1				J・後		国大考古学資料館	
32	静岡県静岡市敷地・登呂								2	Y・後		静岡市登呂博物館	大場 1948, 安本 1949
33	静岡県清水市・相生町								1	Y・後?		静岡大考古学研究室	
34	愛知県宝飯郡小坂井町平井・稲荷山				1					J・晩		埼玉県立博物館	清野 1949・ 1969

	遺 跡	短 剣			腰 飾					把頭		時 期	備 考	保 管 ・ 所 蔵	文 献
		Y形	鳥形	棒状	V形	鳥形	C形	円筒	両頭	Y形	Y形				
35	愛知県渥美郡田原町・吉胡		1		21	1	4					J・晩	行方不明 2	埼玉県博, 天理参 考館, 田原町教委	清野 1949・ 1969, 斎藤編 1952
36	愛知県渥美郡渥美町・伊川津				3		1					J・晩	行方不明 2	渥美町教委	小金井 1923, 伊川津調査団 1985
37	愛知県渥美郡渥美町・保美				1				2			J・晩	焼失		大山 1923, 小金井 1923
38	愛知県名古屋市緑区・雷矢切				1							J・晩	行方不明		清野 1949・ 1969
39	愛知県西春日井郡清洲町・朝日		1									Y・前		貝殻山資料館	中川 1982
40	滋賀県坂田郡米原町・入江		4									Y・中		近江風土記の丘資, 琵琶湖干拓資, 山 口栄太郎	佐原 1960, 丸山 1973
41	滋賀県大津市滋賀里町・滋賀里											J・晩	土製漆塗り 2		田辺編 1973
42	奈良県磯城郡田原本町・唐古		2									Y・前		京大文学部	小林 1943
43	奈良県橿原市畝傍町・橿原		4									J・晩		橿原考古学研究所	酒詰 1961
44	大阪府藤井寺市惣社・国府				1		2					J・晩	行方不明 1	京大文, 埼玉県博	小金井 1923, 浜田・辰馬 1920, 清野 1969
45	大阪府和泉市・池上		1									Y・中	木製	大阪文化財センタ ー	小野・奥野 1978
46	岡山県倉敷市黒崎・中津				1							J・晩		西岡憲一郎	清野 1920
47	岡山県笠岡市西大島・津雲				6			2				J・晩	行方不明 1	埼玉県博, 東大総 資, 阪大解剖	
48	鳥取県境港市・境海峡										3	Y・後?		鳥取県立博物館	佐々木 1981
49	山口県阿武郡阿東町徳佐・宮ヶ久保		1									Y・中中	木製	山口県埋文センタ ー	中村 1977
50	福岡県遠賀郡芦屋町・山鹿		2									J・後中	未製品	芦屋町歴史資料館	九大解剖編 1972

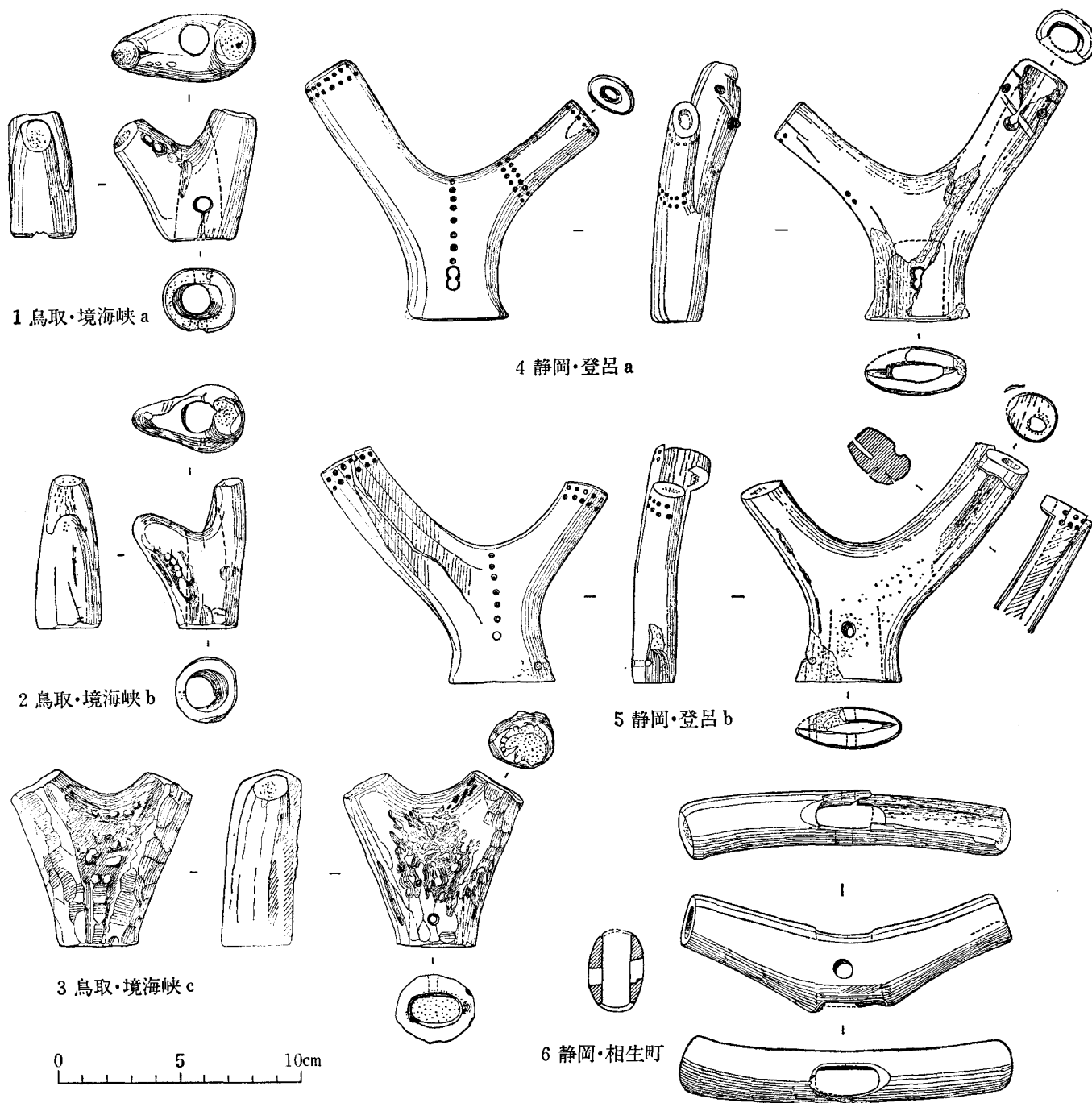


図 11 弥生中・後期のY形把頭

孔を穿っている。第1枝の先端は無孔である。基部の一端に残存している鹿角製の釘は、三角形の破損部を接合するためのものであろう。

鳥取・境海峡の3例はいずれも分岐部の短い単純な形をもち、文様をまったく欠いている。a・b例は全面丁寧に研磨してあり、基部の海绵体を除去して穿った孔は、分岐部まで貫通しており、横断面は円形に近い。a例には両面からの目釘孔があけてあるが、b例にはそれはない。c例は表面を粗く削って仕上げたもので、基部の孔は扁円形、目釘孔は片面だけである。

静岡・相生町例は以上の5例と趣きを異にする弧状のもので、角幹から第4枝に移行する付近、すなわち第3枝の分岐部を中心においているようである。第3枝を切り落としたのち、その部分からやや丸みをおびた長方形の孔（入口で2.7cm×1.2cm）を反対側まで貫通させ、それに直交する目釘孔を表裏からあけている。これも、装飾的要素はまったく付されていない。

この種の遺品は、登呂a例が初見であるが、安本博氏は、縦の孔を「利器類の身を挿入する承孔」、下端の貫通孔を「目釘孔の用をなしている」とみなし（安本 1949：148）、その用途を示唆している。また、坪井清足氏も「柄頭ともいわれている」と紹介している（坪井 1960：75）。筆者にも異論がないが、名称としては「把頭^{つかがしら}」を採用しておきたい。

時期が判明しているのは登呂a・b例だけでともに弥生後期である。基部の縦孔の扁平な形状からすると、身は鉄製品であったと考えてよい。境海峡例も、目釘孔をもち登呂例を単純化したような形態をもつという点から推定すれば、弥生後期頃であろう。基部の縦孔の形状のちがいは、身の形状・材質のちがいを暗示しているのであろう。

III 有鉤短剣の変遷

1 有鉤短剣の出現時期

有鉤短剣の最古例として挙げられる1つは、おそらく福島県大畑遺跡B-4号人骨に阿玉台式および大木7b式の深鉢形土器完形品と伴出し「棒状鹿角製品」として報告された2例（馬目編 1975：407～408）であろう。大畑a例は、「左側の鹿角で第1枝上方部から第4枝叉状部下端までの角幹部を使用し、第3枝が折られている。上方先端が丸く研磨され、下方は折損縁である。表面は自然面のままで鹿角特有の結節が認められる」という。現長でも29.8cmあるから、本来は30cmをはるかにこえる大きさ

Ⅲ 有鉤短剣の変遷

であったわけである。

大畑b例は、「左側の鹿角で第1枝叉状部上端から第3枝叉状部までの角幹である」が、下端は折れている。上端は切断面は研磨されている。表面はやはり自然面である。現長18.8cmであるから、本来は30cmに近い長さであったと推定される。

大畑a・b例とも、穿孔がないことと表面の加工状態からすると未完成のまま副葬された可能性がある。保存状態がきわめて悪く、全体の形はよくつかめないが、福岡・山鹿例に似た一種の鳥形短剣であったことも考えられる。

鳥形短剣の千葉・向油田例は、阿玉台式土器(「Ⅱ類」ないし「Ⅲ類」)に伴ったようであるから(西村 1984: 320)、これが明瞭な姿をもった鳥形短剣の確実な最古例であろう。

また、鳥形短剣の東京・千鳥久保例は1号人骨に伴ったものである。その「遺骸は、ローム層直上にあり、ローム上約30乃至40㎝は有機質を含む黒色土層に覆われ、

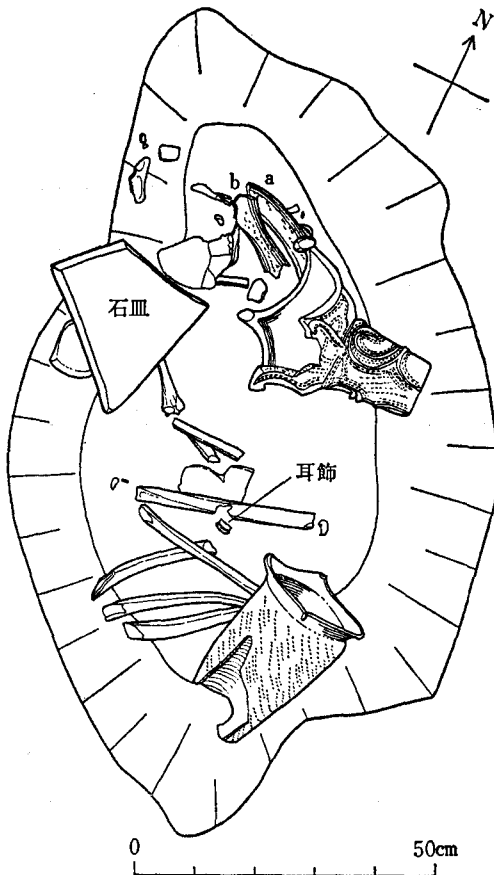


図 12 福島・大畑B-4号人骨と鳥形短剣a・bの出土状態(馬目編 1975 原図)

その上部に30乃至40㎝の厚さを有する純貝層が被覆していた」と復元されたが、その貝層は「堀之内式を主体として若干の加曽利E式を含む上部貝層」ではなく、「勝坂式を主体として、若干の加曽利E式を含む下部貝層」とであると推定された。調査時には人骨上の貝層はすでに除去されていたために、これだけでは「縄文文化期中期に於ける埋葬と認める」(菊池 1957: 58)には、やや躊躇せざるをえないが、向油田例を援用するならば、勝坂式までさかのぼる可能性はないとはいえないだろう。その一方、東北地方では、宮城・南境a・b例は大木9・10式(楠本 1973: 256)とされ、宮城・川下リ例、青島例も大木9・10式と推定されている。こうしてみると、

鳥形短剣は縄文中期前葉に出現した可能性はかなりつよいとみてよい。ただし、それが関東地方で創出され、その後、東北地方へ波及したと主張するには、分布の密度からして無理があるように思われる。

次に、Y形短剣の出現時期についてみよう。岩手・田ノ浜 a 例は、縄文中期末ないし後期初頭に位置づけられるいわゆる門前式土器に共伴したもののようである（吉田 1968 : 74~75）。

宮城・西ノ浜遺跡は、主体となるのは「堀之内式併行」の土器であるから、同遺跡出土のY形短剣もおそらくこの時期と考えられる。

宮城・屋敷浜例も、大木 10 式に伴ったとされている（佐々木富夫氏教示）。

岩手・細浦遺跡のY形および鳥形短剣の時期は、出土人骨の抜歯様式からすると、後期前葉ないし中葉と推定される。

そのいっぽう、宮城・沼津 a 例の頭部に類似するV形腰飾の宮城・南境 a 例は、大木 9・10式（楠本 1973 : 257）、南境 c 例は大木 10 式（後藤 1969 : 11, Pl. 13）とされているから、中期末に位置づけられる。

とすると、Y形短剣とV形腰飾の時間的關係は、前者のほうが後者より後行することになりかねないが、おそらく実際には両者は同時併存の關係にあったというのが真相ではあるまいか。すなわち、Y形短剣は縄文中期末から後期前葉の比較的短い期間に盛行したと考えておきたい。

2 有鉤短剣の頭部と腰飾

Y形短剣の頭部の起源については、長谷部言人氏は、岩手・門前 a 例について「彫刻は、条紐を纏絡したる状を模し、各条の縁には縫孔の如き微細な点々を刻している」（長谷部 1924 : 161~162）と記述し、樋口清之氏は門前 a、大木囲 a 例等について、「例えば革様の帯状物を巻きつけたものをモチーフとした様な形を呈し」、前者は「その革帯の両側線に沿って縫目を表すかの如き点線を連ねている」と観察する。そして、さらに進んで、「此種遺物全体は棒の一端に革を編んで鳥形の柄をつけた物体が存在し、それを写して形が発生したのではないかと思える」としている（樋口 1955 : 28）。

筆者も同感である。その意味で参考になるのは、時間的には晩期まで降るが青森県西津軽郡木造町亀ヶ岡遺跡から、石棒の頭部に木皮の帯を巻きつけて飾りにしている例が発見されていることである（江坂 1957 : Pl. III, 清水 1959 : Pl. 19）。V形腰飾として分類した宮城・南境 c~e 例のように、中期の大木 9~10式にすでに、身を腐

Ⅲ 有鉤短剣の変遷

朽質の別物でつくるいわゆる「腰飾」化したものが知られている事実からすると、頭部と身部を1木でつくり、頭部に木皮または獣皮の帯を巻きつけたものが他に存在したのではないかと想像されるのである。

Y形短剣にせよV形腰飾にせよ、いわば帯を巻きつける前の頭部の形状をどうみるかは一つの問題である。なぜなら、Y形短剣の宮城・大木囲a例にみられる頭部の突起が一見、頭部に編巻きした皮革帯の発端を単に上へ向けてはみ出させただけで、棒状物の本体は突起をもっていないようにもみえるからである。しかしながら、これを仔細に観察するならば、その本体を単なる棒状物とするには、中央横方向の帯がゆるんでいるようにみえるのが難点となる。そこでこの資料に酷似する岩手・田ノ浜a例や宮城・西ノ浜例をみると、明らかに棒状物の基部もY形の突起をもつものとして表現されている。さらに、これらにみられる皮革帯発端の表現を省略したかにみえる宮城・沼津a・b例のばあいも、やはりY形の本体に帯を巻きつけた状態を表現しているとみてよさそうである。結局、大木囲a例に関しても、棒状物自体がY形に鉤状突起をもっていたと解釈できるのである。そして、このことも、木棒に皮革を巻きつけた製品が、他に存在した可能性を教えているのである。

では、角製短剣と腰飾との関係についてはどのように説明されているのであろうか。

長谷部言人氏は、腰飾が知られるようになって間もなく、その「基部の左右貫通孔が、紐を通じて本具を垂下するに用ひたるは、殆んど疑ふの余地がない。又主幹にはその大なる腔、又は带状環に何物かを挿入し、紐を以て尚縛結せることも、略ぼ明らかである。」「腰飾の主幹に、何物を挿入し固定したるやは未だ想像するを得ぬ。或は木質等にして腐蝕したったかも知れぬ。斯かる挿入物は必ずしも武器又は利器として実用的なるを要せず、指揮杖、笏の類でもよい。鹿角製腰飾は即ちその柄なのである」と述べている（長谷部 1924: 163）。

樋口清之氏も、腰飾の「頭にあたかも紐の如きものを通して懸垂の用に供するか、又は紐あるいは紐によって下げられる何かの装具を通したと思われる一孔を必ず有すること」、「この孔と直角に交わる方向に下腹部に環状の縦孔を有して、あたかもこの環に何か相当の太い紐か、棒状のものを挿入する様工夫せられているのではないかと想像」し、「これ単独で用途を持つ遺物と考えるよりも」、「遺存の条件を持たない有機物（草、木、繊維の如き）」を孔または環状部に挿入して使用したもので、最終的には腰飾を「棒状物の柄と考える」のが無理がないとした（樋口 1955: 26）。

筆者も、「腰飾」については基本的に、短剣の把であり、環状部や溝状部に硬質木

製の身の茎が装着されたと推定する。ただし、「腰飾」の一部は、短剣の部分品として出発しながら、本来的な用法から離れて身部をつけずそれだけで、まさに「腰飾」として使用されたものがあると考えている。V形腰飾b・c・d, C形腰飾, そしてY形腰飾がそれである。これは、特に晩期の身部を装着した有鉤短剣そのものが、腰飾の大きさからしてすでに小形できゃしゃな作りになってしまっており、武器の機能をほとんど喪失してしまっていたことから生じた二次的变化であろう。松本彦七郎氏は夙に、氏のいう「角製装飾短剣」のなかに「全く短剣としての要素を失ひて単に装飾品となり終ったもの」の存在を指摘しているが、このことは鳥形短剣が身の断面円形できゃしゃな作りである事実からも容易に推察されるのであって、おそらく鳥形短剣はそもそもの出現の当初から儀器的な性格を多分にもっていたことを示唆しているのであろう。そして、弥生前・中期の西日本の例は、闘争の頻発化に伴って、武器としての機能が復活したと考えるべきなのであろう。

その点では、Y形短剣は断面が紡錘形で大きさに大小の差が小さく、むしろ短剣としての機能を一貫してもちつづけたようにみえる。

3 有鉤短剣と腰飾の系統関係

これまで述べてきたところを、東日本と西日本とに分けて、有鉤短剣・腰飾の諸形態・型式間の系統関係を整理すると、次のとおりである。

有鉤短剣は、まず鳥形短剣として縄文中期前葉に東北・関東地方に出現し、中期末から後期初めごろに東北地方、特に仙台湾周辺で盛行する。そして、後期になると頭部の表現には鳥的な要素が失われてしまう一方、短剣としての機能も著しく後退する。しかし、自在鉤を逆さにしたようなその形態は、晩期さらに西日本では弥生中期まで継承される。晩期例としては、岩手・中沢浜b例が基部を著しく華美に飾っているのに対して、千葉・荒海例は装飾性に乏しい。異常に大きな頭部をもつ秋田・柏子所a例は、身の先端を尖らせておらず、小形であるという点とともに実用の武器から離脱していることを示している。

その一方、千葉・荒海遺跡からは、鳥形短剣とともに棒状短剣が6点出土し、また、東北地方出土の1例も実用的な性格を具備しているようにみえる。その先駆形態としては、縄文後期初頭の福島・大畑a・b例が候補として挙げられるが、小形で実用性がやや疑われる。それと、晩期例との間をつなぐ良好な資料を欠いている。現在知られている資料をみるかぎりでは、鳥形短剣の武器としての側面は棒状短剣に継承されたとみるべきであろうか。

Ⅲ 有鉤短剣の変遷

鳥形短剣と並ぶY形短剣は、縄文中期後葉に東北地方に登場し、後期前葉に盛行する。しかし、後期中葉以降には伝わらない。頭部の表現には個体差のほかには年代差を示唆するような変化がみられはするが、伴出土器との関係でいうと、例えば岩手・田ノ浜a例をただちに最古型式とすることもできないようである。身部を欠損しているのが大部分であるが、最初から最後まで両刃をもつ剣としての歴史を全うしたようである。分布は、現状では、宮城・岩手両県の仙台湾周辺に限られており、その範囲を越えることはない。この事実は、Y形短剣を必要とした社会的背景を考察するうえで、はなはだ示唆的である。なお、Y形短剣は鳥形短剣より後出し、しかも一定時期並存するにもかかわらず、素材の利用法、頭部表現、身部形態など、相互に影響しあう関係にはまったくない。その理由を説明することは容易でないが、あるいは両者間には、着装する人物または用いられる場に何らかのちがいがあったのであろうか。Y形短剣の着装出土例が1例も知られていないのも、この点と関連するのであろうか。

さて、鳥形短剣は縄文中期末ないし後期前葉には、その頭部あるいは把頭のみで鹿角製品——いわゆる腰飾を派生させる。しかし、既知例は僅か1点というように普及するまでには至らなかったようである。そして、晩期になると再び当該期の鳥形短剣の把頭部分だけを鹿角でつくった部分品が出現する。けれども、このばあいも、東北地方出土の莫大な量に達する骨角製品中にあるのは稀有な存在である。さらに、仙台湾周辺では腰巻に綴じつけたかと想像したY形腰飾を分化させるが、これも特定少数の人物用であったようである。したがって、東日本においては、一貫して有鉤短剣が主であって、腰飾はそれを僅かに補なう程度であったといえよう。そして、それらの最盛期が縄文中期後葉から後期前葉であったことも大きな特徴であった。

その一方、西日本においては、縄文中・後期に属する有鉤短剣・腰飾類の出土は、福岡・山鹿a・b例が知られているだけである。全体の中ほどに第3枝をもってくる鹿角の利用法は独特であるが、九州なり西日本で発生したとするよりも、磨消縄文の技法などとともに、東日本から伝わった習俗と考えるほうが自然であろう。

西日本に有鉤短剣が再登場するのは、縄文晩期のことである。奈良・橿原a例は、叉状部を上下に貫通する孔をもち、有文の基部と無文の身部をもつという点で、秋田・柏子所例と共通する。ただし、橿原a例の文様は近畿地方産であることを明示している。にもかかわらず、西日本の晩期遺跡からの出土例は、橿原遺跡の4例と吉胡遺跡から「腰飾」として出土した108号の1例にすぎない。晩期の有鉤短剣もまた、東日本から伝来したと考えるのが妥当なのであろう。

西日本の晩期に、有鉤短剣に代わって盛行するのは腰飾である。西日本における腰

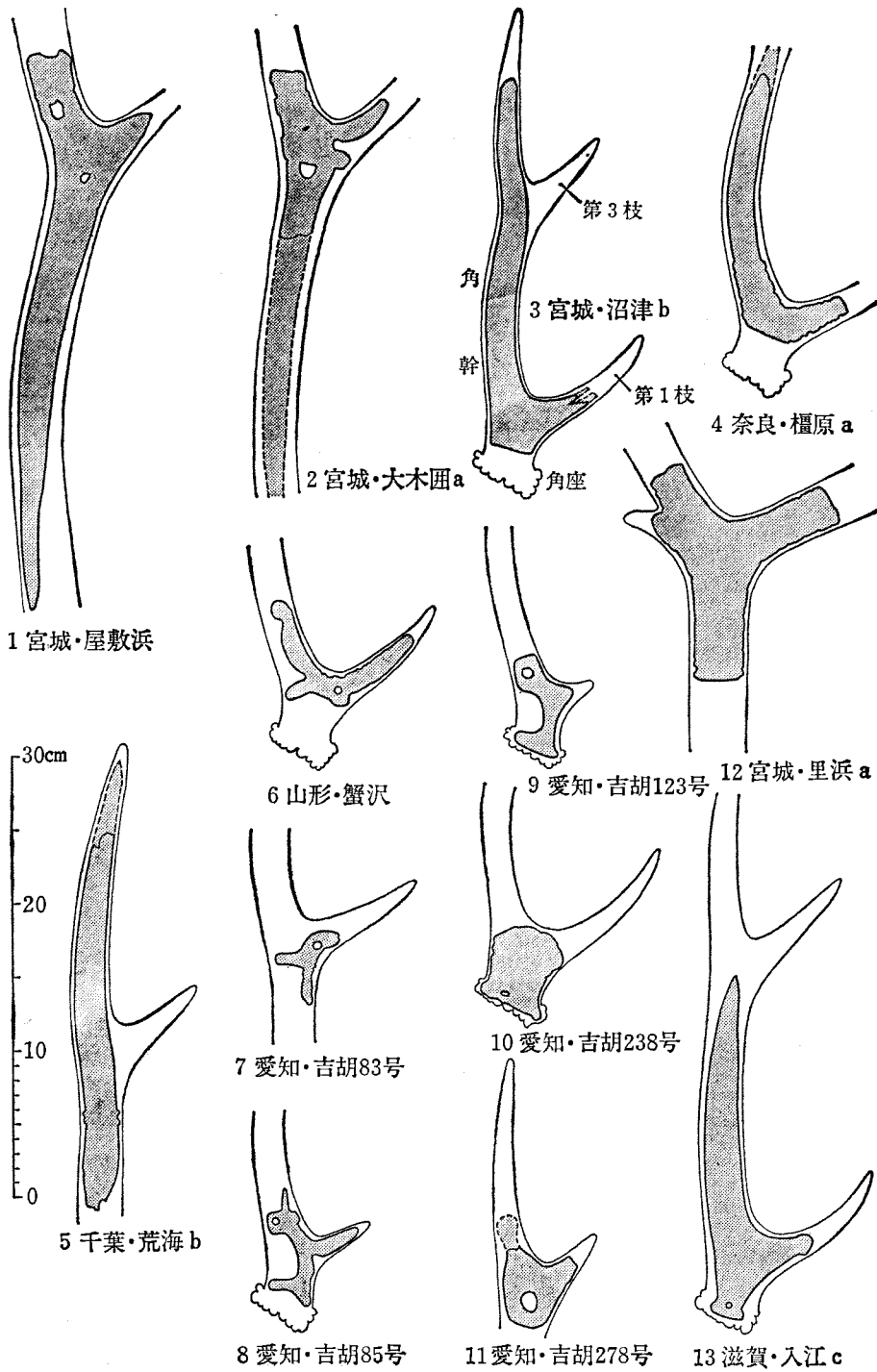


図 13 有鉤短剣および腰飾の鹿角利用部位

IV 有鉤短剣の意義

飾の初見は晩期であるが、その系譜を論ずる際は、愛知・吉胡の諸例がまずとりあげられるべきであろう。それらのうち特に注意をひくのが、関東以西で出土した唯一の鳥形腰飾である吉胡83号例であって、その形態は山形・蟹沢例など東北地方出土品に近い。この腰飾が吉胡集団で製作されたものか、それとも東北地方からの搬入品であったのかは、着装者の抜歯型式が不明な点もあり、ただちには判断しかねるが、いずれにせよ、西日本の腰飾の起源が東北地方にあることを暗示する好資料であろう。

西日本の腰飾の主要な形態・型式はV形a類としたものである。V形a類は変異型も多いが、そのなかで初源形態と推定されるのは、吉胡85号例であろう。この85号例のもっとも注目すべき点は、それが晩期に属するにもかかわらず、宮城・大木田遺跡出土のY形短剣の頭部を簡略化したような形状をもっていることである。大木田例を後期前葉までさげてきても両者の時間差は千年に近いわけである。その間の事情を物語る材料はまったく知られていないが、あるいは全体が木製の有鉤短剣が縄文中・後期にも存在したことを想定すべきなのであろうか。

西日本の腰飾では、V形a類としたものは木製の身部を箆めこんだ形跡が歴然としているが、V形b・c類にいたっては明らかにそれだけで用いられた装身具と化している。また、C形腰飾の多くも単独に使われた可能性がある。西日本では、鳥形腰飾・V形腰飾a類に始まり、多様な形態・型式を生みだし、量的にも東日本よりはるかに豊富であるが、晩期のうちに最盛と終焉を迎えるところに大きな特徴があった、とまとめることができよう。

西日本の弥生時代の有鉤短剣については、素材の用い方が、鳥形短剣と同様に、角座を基部にもってきているので、あえて鳥形として分類しておいたが、V形腰飾a類の津雲・長谷部17号例と、入江a～d例、朝日例との類似性からもうかがえるように、V形腰飾に身部をはめこんだ状態を1本づくりにしたものである。したがって、系統としては、鳥形短剣の榎原a例や吉胡108号例との関連ももっているが、同時にV形腰飾a類との関係も深いということになる。

IV 有鉤短剣の意義

1 有鉤短剣の着装者

では、有鉤短剣なり腰飾の着装者はどのような性格をもっていたのであろうか。この問題を考えるには、埋葬人骨に伴い「着装」状況がわかると同時に、着装者の諸属性が判明する例を分析するのがよい。

ところが、縄文中・後期に属するこれまでの出土品のうち、埋葬人骨に伴ったのは僅か4例6点だけである。

福島・大畑例は、4号人骨（男性・壮年）の「左肩に置かれた」状態で2本発見されている（馬目編 1975：38～39, 512～513）。

東京・千鳥久保例は、1号人骨（男性・熟年）の「肘関節より曲げられた右上膊内側にこれと平行して胸廓部に密着して置かれたと思われる状態」で発見されている（菊池 1957：56）。

宮城・南境の鳥形短剣例は、3号人骨（男性）の腸骨付近から出土している（楠本政助氏教示）。

福岡県山鹿遺跡の変形鳥形短剣2本は、2号人骨（女性・壮年）の「胸部に2本とも基部を頭部にむけ並置されていた」（九大解剖学教室編 1972：68）。

これらのうち、特に有名なものは千鳥久保例と山鹿例であるが、前者について菊池義次氏が「本来右側胸部に着装されたまま埋葬された」ものではないかと考え（菊池 1957：64）、後者について前川威洋氏が「胸部に垂下されていたものと想定」した（九大解剖学教室編 1972：68）ところから、この種の角製品を「胸飾」あるいは「垂飾」とする考えがでてきたわけである。

しかしながら、山鹿例については2本とも基部の穿孔は途中で終っており貫通していない。この孔が本来紐を通して身体に装着するためのものであったことは、他の多くの例に徴して明らかであるから、その点ではこの2本は未製品なのである。この2例は第1枝直上で切断されて製作されているが、その切断部はその後の仕上げ加工がなされておらず、粗面のままである。したがって、山鹿例は未製品を副葬したものであるから、その出土位置だけから「胸飾」と判定するのは妥当ではない。

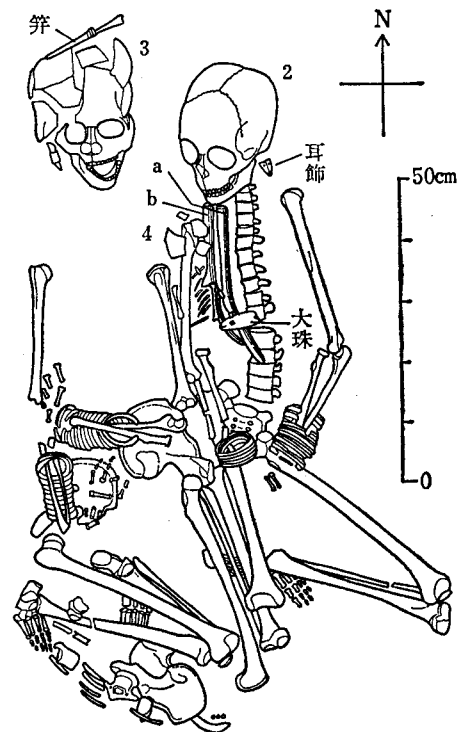


図 14 福岡・山鹿2・3・4号人骨と鳥形短剣 a・b の出土状態（九大解剖学教室編 1972 原図）

IV 有鉤短剣の意義

大畑例は縄文中期前葉で、この種の遺品としては現在のところ最古例に位置づけられるが、2本とも表面は結節をのこす自然面のままで研磨されていない。2本とも一端を欠損しているので確認できないが、少なくとも1本は紐通しの孔をもっていない可能性がつよい。とすると、この例も副葬用の未製品の可能性がある。

その点では、小形で形状もやや異なるが南境3号人骨の腸骨付近出土例は完形品であり、従来の腰飾と同様の取扱いをすることができるであろう。

以上の4体では、性別は東北・関東地方の3体が男性、九州の1体が女性である。僅か4例にすぎないが、この事実是有鉤短剣の着装者の性に地方差が存在する可能性があることを示唆している。これを予測を混えて解釈すれば、男性の着装品として出発した有鉤短剣が、西日本に伝わったときは女性の着装品へと転化したということになろう。問題はその背景であるが、その点を縄文晩期の着装例を検討しながら探ってみることにしよう。

縄文晩期の有鉤短剣——その大多数は把頭または腰飾であるが——の着装出土例は、福島県三貫地遺跡の1例を除くと、他はすべて東海地方西部から近畿・中国地方という比較的せまい範囲に限られている。この地方は共通の抜歯様式をもつという点においても、統計的な操作を容易にしているので、ここではこの地方だけで議論していくことにしたい。表2は、腰飾着装者の性・年齢・抜歯型式を示したものである。

まず、腰飾着装者の性・年齢と腰飾の鉤状突起の有無について調べてみると、表3のとおりである。

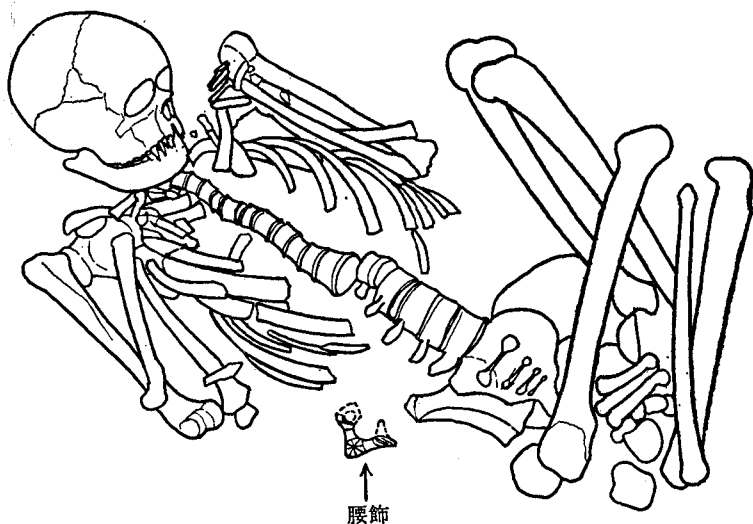


図15 岡山・津雲3号人骨とV形腰飾の出土状態（清野1920写真を図化）

表 2 腰飾着装者一覧表

	遺 跡	人 骨 番 号	性	年 齢	抜 歯	型 式	腰飾の型式										
1	愛 知・吉 胡	清 野 83号	?	成人	<table><tr><td>?</td><td>?</td></tr><tr><td>?</td><td>?</td></tr></table>	?	?	?	?	?	鳥形腰飾						
?	?																
?	?																
2	"	" 85	男	熟年	<table><tr><td>C</td><td>M</td><td>M</td><td>C</td></tr><tr><td>I</td><td>I</td><td>I</td><td>I</td></tr></table>	C	M	M	C	I	I	I	I	4 I	V形 a		
C	M	M	C														
I	I	I	I														
3	"	" 92	女	壮年	<table><tr><td>C</td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td>I</td><td>I</td><td>I</td><td>I</td></tr></table>	C				I	I	I	I	4 I	V形 a		
C																	
I	I	I	I														
4	"	" 94	女	老年	<table><tr><td>?</td><td>?</td></tr><tr><td>I</td><td>I</td><td>I</td><td>I</td></tr></table>	?	?	I	I	I	I	4 I	C形 b				
?	?																
I	I	I	I														
5	"	" 103	男	熟年	<table><tr><td>C</td><td></td><td>C</td></tr><tr><td>?</td><td></td><td>C</td></tr></table>	C		C	?		C	2 C	V形 c				
C		C															
?		C															
6	"	" 104	男	熟年	<table><tr><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table>					—	V形 a						
7	"	" 106	男	熟年	<table><tr><td>?</td><td>?</td></tr><tr><td>I</td><td>I</td><td>I</td><td>I</td></tr></table>	?	?	I	I	I	I	4 I	V形 a				
?	?																
I	I	I	I														
8	"	" 108	男	熟年	<table><tr><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table>					—	鳥形短剣						
9	"	" 115	男	壮年	<table><tr><td>C</td><td></td><td>C</td></tr><tr><td>I</td><td>I</td><td>I</td><td>I</td></tr></table>	C		C	I	I	I	I	4 I	V形 a			
C		C															
I	I	I	I														
10	"	" 120	男	壮年	<table><tr><td>P</td><td>I</td><td>M</td><td>C</td></tr><tr><td>I</td><td>I</td><td>I</td><td>I</td></tr></table>	P	I	M	C	I	I	I	I	4 I	V形 a		
P	I	M	C														
I	I	I	I														
11	"	" 123	男	熟年	<table><tr><td>C</td><td></td><td>C</td></tr><tr><td>C</td><td></td><td>C</td></tr></table>	C		C	C		C	2 C	V形 a				
C		C															
C		C															
12	"	" 128	男	壮年	<table><tr><td>C</td><td></td><td>C</td></tr><tr><td>I</td><td>I</td><td>I</td><td>I</td></tr></table>	C		C	I	I	I	I	4 I	C形 c			
C		C															
I	I	I	I														
13	"	" 130	男	成人	<table><tr><td>?</td><td>?</td></tr><tr><td>?</td><td>?</td></tr></table>	?	?	?	?	?	V形 d						
?	?																
?	?																
14	"	" 143	女	熟年	<table><tr><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table>					—	C形 b						
15	"	" 145	?	成人	<table><tr><td>?</td><td>?</td></tr><tr><td>?</td><td>?</td></tr></table>	?	?	?	?	?	V形 a						
?	?																
?	?																
16	"	" 159	男	熟年	<table><tr><td>P</td><td>C</td><td></td><td>C</td><td>P</td></tr><tr><td>C</td><td>I</td><td>I</td><td>C</td><td></td></tr></table>	P	C		C	P	C	I	I	C		2 C	V形 d
P	C		C	P													
C	I	I	C														
17	"	" 203	男	熟年	<table><tr><td>?</td><td>?</td></tr><tr><td>?</td><td>?</td></tr></table>	?	?	?	?	?	V形 c						
?	?																
?	?																
18	"	" 232	男	老年	<table><tr><td>?</td><td></td><td>I</td><td>?</td></tr><tr><td>I</td><td>I</td><td>I</td><td>I</td></tr></table>	?		I	?	I	I	I	I	4 I	V形 a		
?		I	?														
I	I	I	I														
19	"	" 238	男	熟年	<table><tr><td>?</td><td>?</td></tr><tr><td>I</td><td></td><td></td><td></td></tr></table>	?	?	I					V形 c				
?	?																
I																	
20	"	" 249	男	熟年	<table><tr><td>C</td><td></td><td>C</td></tr><tr><td>I</td><td>I</td><td>I</td><td>I</td></tr></table>	C		C	I	I	I	I	4 I	V形 a			
C		C															
I	I	I	I														
21	"	" 251	男?	成人	<table><tr><td>?</td><td>?</td></tr><tr><td>?</td><td>?</td></tr></table>	?	?	?	?	?	V形 b						
?	?																
?	?																
22	"	" 271	?	成人	<table><tr><td>?</td><td>?</td></tr><tr><td>?</td><td>?</td></tr></table>	?	?	?	?	?	C形 a						
?	?																
?	?																
23	"	" 278	男	熟年	<table><tr><td>C</td><td></td><td>C</td></tr><tr><td>C</td><td>I</td><td>I</td><td>I</td><td>C</td></tr></table>	C		C	C	I	I	I	C	4 I 2 C	V形 d		
C		C															
C	I	I	I	C													

IV 有鉤短剣の意義

	遺 跡	人 骨 番 号	性	年 齢	抜 歯	型 式	腰飾の型式
24	愛 知・吉 胡	清 野 293	男	熟年?	$\frac{?}{?} \mid \frac{?}{?}$?	V形 d
25	"	" 300	男		$\frac{?}{?} \mid \frac{?}{?}$?	V形 d
26	"	中 山 25	男	熟年	$\frac{C}{I I I I} \mid \frac{?}{?}$	4 I	V形 a
27	愛 知・伊川津	小金井 6	男	老年	$\frac{C}{\Delta \Delta} \mid \frac{C}{\Delta \Delta}$	2 C ?	
28	"	" 10	?				
29	"	鈴 木 210	男	壮年	$\frac{P C}{I I I I} \mid \frac{C P}{?}$	4 I	
30	"	1984-1-1	男?	熟年	$\frac{P C}{?} \mid \frac{C P}{?}$?	V形 c
31	愛 知・保 美	宮 坂 4	男	成人		?	
32	"	小金井 6	女	壮年	$\frac{C}{C I I I I C} \mid \frac{C}{C}$	4 I 2 C	両頭
33	愛 知・稲荷山	清 野 34	男	熟年	$\frac{C}{C} \mid \frac{C}{C}$	2 C	V形 a
34	愛 知・雷	清 野 1	男	壮年	$\frac{C I}{C} \mid \frac{I C}{C}$	2 C	V形 d
35	大 阪・国 府	浜 田 3	男	熟年	$\frac{P C}{?} \mid \frac{C}{?}$	0	V形 d
36	"	清 野 3	女	熟年	$\frac{?}{I I I I} \mid \frac{?}{?}$	4 I	C形 a
37	"	小金井 6	女	壮年		?	C形 b
38	岡 山・中 津	西 岡 6	男	壮年	$\frac{C}{?} \mid \frac{C}{?}$	0	V形 b
39	岡 山・津 雲	清 野 3	男	壮年	$\frac{C}{I} \mid \frac{C}{I}$	4 I ?	V形 a
40	"	" 23	女	老年	$\frac{C}{I I I I} \mid \frac{C}{?}$	4 I	円筒形
41	"	" 53	男	熟年	$\frac{P C}{?} \mid \frac{I}{?}$	0	V形 b
42	"	長谷部 8	男	熟年	$\frac{C}{C} \mid \frac{C}{C}$	2 C	V形 a
43	"	" 17	男	熟年	$\frac{C}{I} \mid \frac{C}{?}$		V形 a
44	"	" ?	?				円筒形
45	"	大 串 ?	?				V形 b

表 3 腰飾着装者の性・年齢と腰飾の形態

		壮 年	熟 年	老 年	有 鉤	無 鉤	合 計
男	性	6	19	2	20	7	27
女	性	3	2	2	1	6	7
不	明				4	2	6

すなわち、腰飾着装者の性は、男性27例、女性7例であって、男性が全体の約80%を占めている。その存在が知られるようになった大正時代末に、すでに「此種の品は、成年期の男性骨にのみ発見せられる様である。而して一人骨には一個以上存在して居た事が無い」（清野 1920：10）と喝破されていたとおりである。

そこで例外的ともいえる女性の着装していた腰飾の形態をみると、V形aが1例、C形aが1例、C形bが3例、円筒形が1例、両頭が1例である。これらのうち、V形aは男性に普遍的にみられる形態・型式であるが、C形b・円筒形・両頭の三種に関しては、男性の着装例はまったく知られていない。また、C形aとした国府・清野3号例も、同形態のものはないうえにC形bとの関係が深いように看取される。したがって、女性7例のうちの1例だけが男性と共通し、他はいずれも女性に固有の形態である。しかも、後者の6例については顕著な鉤状突起をもっていないのが大きな特徴となっている。しかしながら、女性の着装頻度の低いこと、そして女性固有形態の出土数があまりにも少ない事実からすると、それはあくまでも男性の腰飾に触発されて発生をみたと推定してまちがいあるまい。

次に、腰飾着装者の抜歯型式との関係をみると、表4のとおりである。

このように腰飾の着装者は、男性は下顎の切歯4本を抜去した4I型が10例、切歯4本と犬歯2本を抜去した4I2C型が1例、すなわち4I系列に属するものが11例であるのに対して、下顎の犬歯2本を抜去した2C型は3例、犬歯2本と中切歯2本を抜去した2C2I型は1例、すなわち2C系列に属するものは4例にすぎない。それに対して女性のばあいは、4I型が4例、4I2C型が1例に対して、2C型・2C2I型は皆無である。

両系列間の関係は、愛知県吉胡遺跡では、4I系が男性37例、女性28例の計65例に対して2C系が男性29例、女性20例の49例である。また、岡山県津雲遺跡では、4I系は男性9例、女性24例の計33例に対して、2C系は男性23例、女性12例の計35例である。吉胡遺跡における成人の抜歯率は133体のうち125体の94%、津雲遺跡における抜歯率は84体のうちすべての100%であるから、大ざっぱな言い方をすれば、1集団の構成員のうち成人は、抜歯系列によりほぼ二分されるわけである（春成 1982：226）

IV 有鉤短剣の意義

表 4 腰飾着装者の抜歯型式と性（カッコ内は性不明）

抜歯型式	性	例 数	抜歯系列	性	例 数
4 I 型	男 性 女 性	10 4	4 I 系	男 性 女 性	11 5
4 I 2 C 型	男 性 女 性	1 1			
O 型	男 性 女 性	5 —			
2 C 型	男 性 女 性	3 —	2 C 系	男 性 女 性	4 —
2 C 2 I 型	男 性 女 性	1 —			
無 抜 歯	男 性 女 性	3 1			
不 明	男 性 女 性	4 2(6)			
合 計	男 性 女 性	27 8(6)			

～229)。

したがって、全体的な傾向からすると、腰飾の着装者は1集団内の4 I系の男性成員たちに一方的に遍していることは明らかである。筆者はすでに何回となく、抜歯の2系列は婚姻儀礼の際に生じたこと、両者は出身集団の違いを意味することを主張してきた。そして、この腰飾の着装者の抜歯型式を根拠の一つに用いて、4 I系列はその土地出身者、2 C系列は他集団からの婚入者である、と説いてきたのである（春成1980・1982・1983など）。では、なぜ腰飾はその土地の出身者の男性が主に着用するのであろうか。

2 有鉤短剣の機能

有鉤短剣は、その名称のごとく、基本的に剣の形に鉤状の突起を設けるという特異な形態を、縄文・弥生時代の長い期間にわたって保持しつづけた。すなわち、この種の角製品が存在するところでは、鉤についての共通の理解があったわけである。ここに鉤のもつ意味について考察を進める必要が生じるのである。

さて、鉤の機能については、金関丈夫氏の見解が示唆に富んでいる。氏は、病人から脱出しようとする魂を引っかけて生命をとりもどす呪具に、釣りばりや鉤状の石が用いられるという東南アジアの諸例をあげ、鹿児島県広田遺跡出土の鉤状貝製品や弥生時代の有鉤銅釧の鉤も、自身の魂の逃亡を防ぐ拘禁具とみるべきだ、という。その

一方、鉤状の装身具が、「外部からこちらへ侵入する邪霊を引きとめる効用もあった」事例を南米各地の例から引き、弥生・古墳時代の巴形銅器や平城宮跡出土の「隼人盾」の紋様はこの類である、と考えている。そして、最後に、「いわゆる装身具の表わす根元の信仰は、日本、中国、南方といわず、世界いたるところ共通である」ことを提唱している（金関 1963, 1982: 28~33）。

坪井清足氏は、奈良県平城宮跡西南隅の井戸跡出土の「隼人楯」の中心飾りにみえる「鉤形文」すなわち「双頭の巴文」を、「釣針を楯面に描いて魔除けとした」スマトラ等の民族例を金関氏から教わり、「鉤形＝釣針で、辟邪の考え」に基づくと解釈した。そして、この例を大阪府和泉黄金塚古墳出土の楯に装着した巴形銅器と平安時代以降の巴文とを結ぶ資料と位置づけて、「弥生時代にはじまる巴形銅器から、現代の神社の祭礼用の楯に巴文を飾るものまで、連綿としたつながりがある」と考えている（坪井 1968: 302~304）。

また、三島格氏も、弥生遺跡出土の巴形銅器や有鉤銅釧あるいは熊本市黒髪町遺跡出土の壺形土器に貼付けてある6個の鉤形突帯に、「辟邪の呪力」を認めようとした。ただし、氏は、そうした器物のスイジガイ起源説を否定しただけで、鉤そのものの系譜については言及を避けている（三島 1973）。

このように弥生時代以降にみられる鉤については、諸氏によって資料の提示と意見の提出がなされているが、縄文時代にすでに存在する鉤に関しては、筆者以外に問題にしようとした研究者はいない（春成 1980・1983）。私は、前節でふれた腰飾の着装者の抜歯型式の示すところを手がかりにして鉤の意味を考える。

西日本縄文晩期の腰飾についてみると、その着装者は、もっぱらその土地出身者で既婚の男性である。すなわち、鉤状突起をもつ腰飾を必要としたのは、その集団で生まれ育ち、婚姻後もその集団に居を構えた男性たちであった。ところで、遺跡から出土した腰飾はしばしば著しい磨滅を示している。そして、腰に垂下するための紐通しの孔が欠けるとまた別の個所に孔をあけて使っている。また、腰飾がいわゆる包含層や貝層中から検出される事例は西日本ではきわめて稀である。したがって、腰飾というものは、おそらく一旦身につけたら亡くなるまで、いや亡くなっても肌身離さず、生涯を通じて唯1個のものを大切に扱うというのが使用上の原則であったのである。

ここで、鉤は靈魂を結びとめる機能をもつ、とする金関丈夫氏の考えを導入するならば、その集団の出身者たちは腰飾によって何かの霊をわが身に付着しておかなければならなかった、または外部から侵入する邪霊を防がなければならなかったのに対して、婚入者たちはそうした必要がなかった、あるいはそうしてはならなかった、とい

IV 有鉤短剣の意義

うことになろう。

縄文時代の人々が、自らの集団を維持・存続させていく基盤として、いわゆる集団領域をもっていたことはすでに明らかにされているが（林 1984など）、それは祖先からいわば血縁的なつながりによって代々伝えられてきた土地という性格をもつ。そして、当然のことながら、その土地の出身者はその土地との間に、生まれながらにして一種の特別な関係を結んでいる。ところが、その土地との関係は、婚姻を契機としてその後の疎または密が決まり、その状態は生涯にわたってつづく。とすると、成人になってから腰飾を媒体としてわざわざ結びつけておきたいと願う大事な霊とは、その集団の祖先の霊またはその土地の霊といえないであろうか。かかる観念が生じる背景については後述するが、縄文社会のある段階においては、婚後も自己の出身集団にどどまらばいい、その集団の祖先あるいは土地といわば血縁的な結びつきをもっている事実を証明する標徴が必要とされ、それが腰飾にほかならなかった、と私は考えたのである。このことは、抜歯の2系列の対立や墓地における二分にも暗示されているように、1個の居住集団の内部で、他集団からの婚入者たちの権利の及ぶ範囲に一定程度の制限を加えていたことを意味するものである。

このように推論するのであれば、1居住集団の成人のほぼ半数はその土地の出身者と考えられるのであるから、腰飾の出土例はもっと多くなければならない。しかし、実際にはそうではない。愛知県吉胡遺跡でも、4 I系の男性37体のうち9体が着装しているにとどまり、O型と無抜歯例を吉胡集団の一次的成員と考えても、着装例は12体をわずかに上まわる程度であるし、同県稲荷山遺跡にいたっては、4 I系男性15体のうち腰飾を着装していたのは1体もなく、2 C系男性12体のうちの1体にすぎないのである。そして、より西方の岡山県津雲遺跡のばあいは、男性が4例、女性が1例であるから、男性が主に着装するという原則は守られているが、男性の抜歯型式は4 I型の変形またはO型が3例、2 C型が1例となっており、4 I型がほとんど排他的に着装するという傾向は認められない。その意味で問題になるのは、腰飾はすべて骨角製品であったのかということである。この点に関して示唆的であるのは、滋賀県滋賀里遺跡81号墓から検出された「粘土を漆で練り固めて作った可能性のある朱塗りの土製品」で、それは「有孔の扁平な腰飾状のもの」（田辺編 1973：15, 17）である。同 207 号墓出土品も類似品のようであるが、この事実は縄文晩期の腰飾が骨角製品だけでなかったことを明示している。特に、弥生中期の木製有鉤短剣の出土からすると、木製品は当時かなり普及していたのではないかと疑われる。殊に、叉状部をもつ材料としては木の枝ほど容易に入手しうるものはない。縄文時代前期以来、豊富な

器種と漆塗りの精巧な木製品が存在する事実が明らかにされてきたうえに、腰飾の身部に木製品の存在が想定される以上、全体を木でつくった遺品の存在はむしろ予想しておくのが自然というものであろう。したがって、腰飾の着装頻度の低さを絶対視して議論を進めることは、逆に誤った結論へと導く可能性がないともいえない、と私は考えるのである。

3 有鉤短剣の社会的背景

有鉤短剣の最古例は現在までのところ、東北地方では福島・大畑例、関東地方では千葉・向油田例であって、ともに縄文中期前葉までさかのぼる。しかし、向油田例および時期を確定しがたい東京・千鳥久保例などは、関東では稀な中期の例に属する。そして、後期にいたっても、関東では変形・矮小化した千葉・大倉南例などがわずかに知られているにすぎない。したがって、Y形短剣はもちろん鳥形短剣も、東北地方の太平洋岸において中期のうちに出現・盛行し、関東地方へはわずかにその余波が及んだものと考えるのが穏当である。そうであれば、有鉤短剣を生みだし、その後も一貫してそうした器物を必要としたのは東北地方の縄文社会であったことになる。そして、その中心が出土量からして仙台湾周辺にあったことは、ほとんど疑いない。

有鉤短剣が個人の手にもたれ、ある時は腰に垂下されたことはほとんど確実であるが、それに類するものとして、注目すべきは、同じく中・後期にみられる鯨骨製の骨刀であろう。また、分布がより北に偏るが青竜刀形石器も出現時期を共有しており注目すべき遺物である。これらが武器または武器形儀器であることは明らかであるが、そうすると、これらも有鉤短剣と同じく男性の装備の一部であって、共通の発生基盤をもっていた可能性が考えられよう。

ここで、仙台湾周辺における側切歯抜去の習俗がほぼ同時期に登場・盛行する点を想起したい。筆者は、その抜歯様式が左側切歯または右側切歯を抜去するL型またはR型の2型式からなりたっており、その割合は全体的にみて1対1、また男女それぞれにおいても1対1であることに注目して、男女それぞれが婚出入しうる選択居住婚の段階にあることを示していると考えた。さらに、それは、外洋性漁撈の発達を基盤として、それに従事する男性の発言権の拡大が、やがて夫方居住婚の頻度を高いものへと変えていったことの反映であると捉えようとした。そうして、従来の妻方居住婚と新出の夫方居住婚とが混在するなかで、婚姻後も出身集団にとどまる男性と婚入してくる男性との間に利害の対立が生じたことをみようとしたのである（春成 1983：21～22）。

IV 有鉤短剣の意義

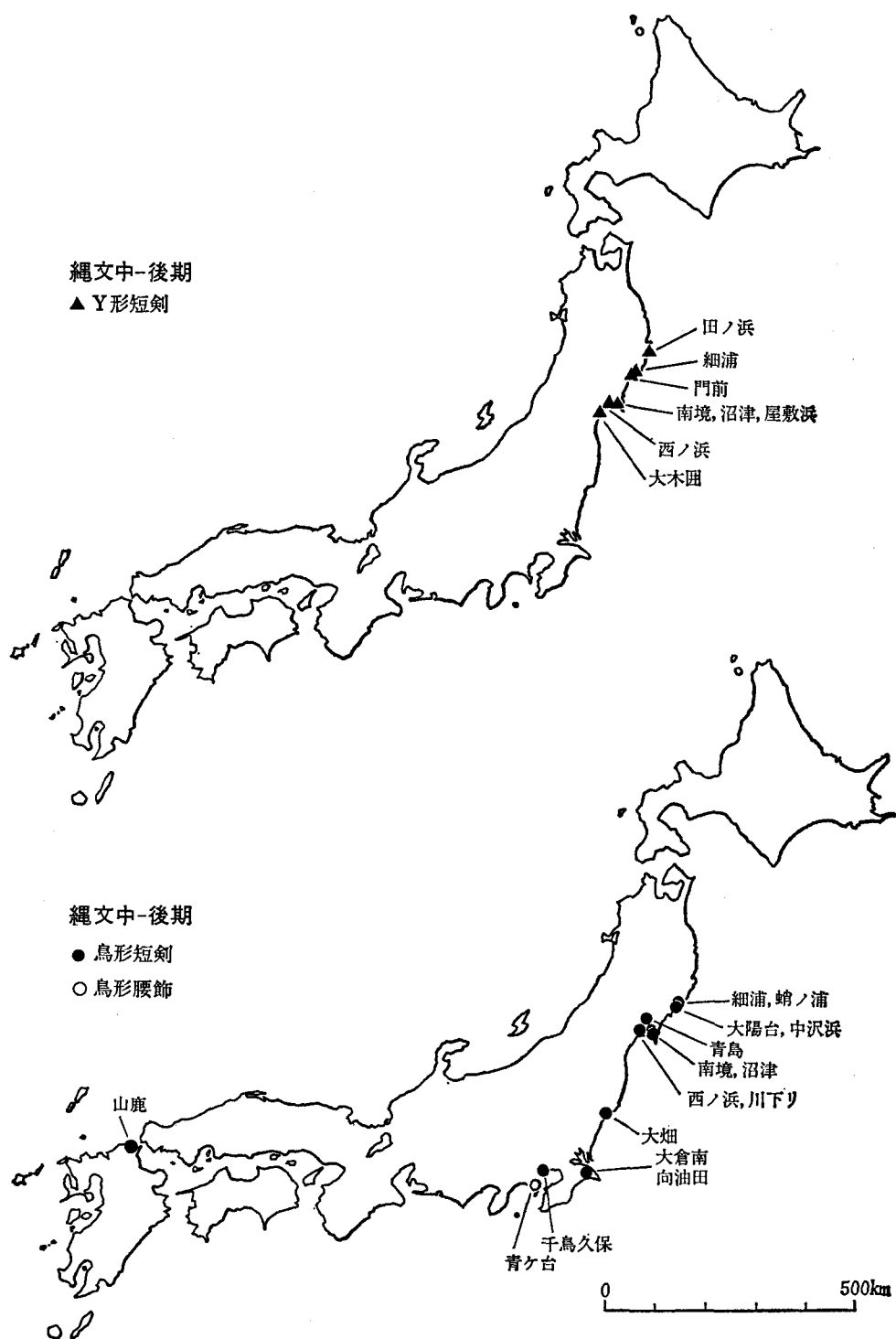


図 16 縄文中・後期の有鉤短剣・腰飾の分布

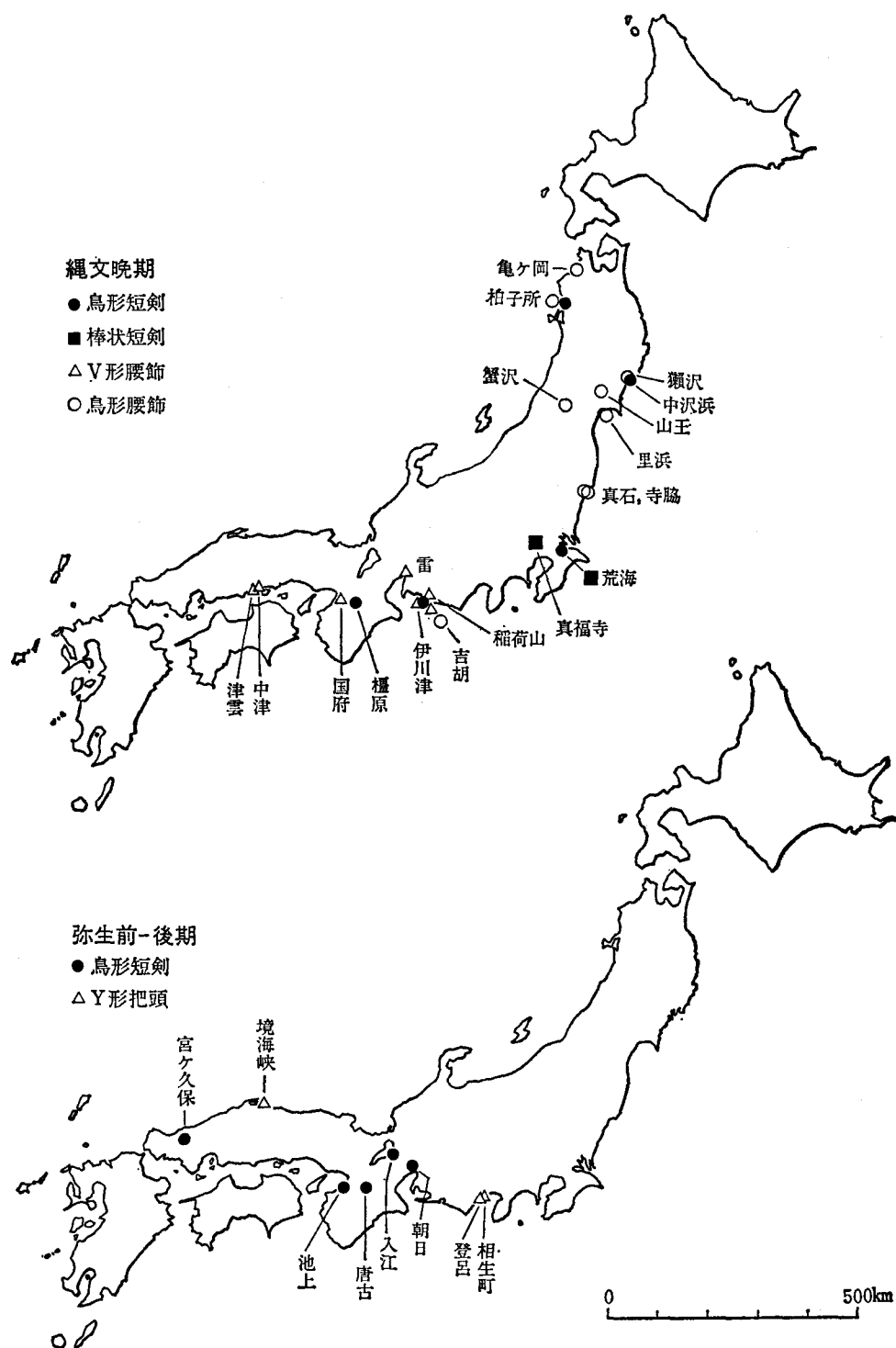


図 17 縄文晩期～弥生後期の有鉤短剣・腰飾・把頭の分布

IV 有鉤短剣の意義

この考えがなりたつとすれば、そうした矛盾を緩和する強制力の発生を一方に想定することもできよう。しかりとすれば、それを暗示するのが、有鉤短剣であり骨刀・青竜刀形石器であったのではないであろうか。これらの骨角製品が、実用の武器であったのか、それとも一種の威儀の具であったのか、さしあたってはあまり重大な問題ではない。しかしながら、Y形短剣や鳥形短剣として統一的な武器の形制をとっている事実は、やはり背後に明確な武器の形態を析出させるにいたる個人同士であれ、あるいは集団間であれ、戦闘が存在したか、存在しうる状況が広範囲に発生していたのであろう。したがって、有鉤短剣は、かかる武器の発生・盛行をみた東北地方太平洋岸の諸集団が、縄文社会における集団内・集団間の緊張関係の激化に最初に到達したことを示す証しである。

では、有鉤短剣衰退の背景についてはどう説明されるであろうか。すでにみてきたように、Y形短剣は縄文後期中葉ごろには姿を消す一方、鳥形短剣もその頃になると、量的・質的低下が著しくなる。このように、東日本においては後期中葉頃にはもはやそれが出現した当時の社会的背景、換言すれば、集団内・集団間の緊張関係が緩和しつつあったと考えざるをえない。これが、1集団内の男性構成員のうち半数が他集団からの婚入者で、相対的に不安定な構造をもつ選択居住婚の段階から、婚入者の大多数が女性で夫方居住婚が優勢ないし支配的な段階への移行を意味することはいうまでもない。

それに対して、西日本の東海地方西部から近畿・中国地方にかけての地域では、晩期になってから、腰飾が盛行する。このばあいも、抜歯型式の分析によるかぎり、同様の社会的背景を想定することが可能である。この地方では東日本より一時期遅れてこの時期に妻方居住婚から選択居住婚への移行期を迎える（春成 1982：235～247）。したがって、かつての東日本と同様の事態が生じたと考えることができる。東海西部から近畿地方で手持ちの石剣・石棒・石刀が盛行するのも、この時期である。しかし、この事態も、この地方においては弥生時代になると、早くも過去のものとなる。こうして弥生時代には腰飾は消滅し、わずかにその残映が従来の鳥形短剣の身部形態を一新した滋賀・入江遺跡の諸例に認められるが、それは武器としての機能が逆に強化されている点に、その変質した姿を見出すことができるのである。

今回の共同研究のテーマである基層信仰の問題にほとんど足を踏み入れることができないままに稿を終えるにいたり、内心忸怩たるものがあるが、鳥形短剣の頭部表現の意味、有鉤短剣と平安時代以降の鹿角杖との関係などについては機会を改めて論じ

ることにしたい。

(1985. 2. 25)

謝辞

小論をまとめるにあたって、多くの方々から貴重な資料の提供にあずかり、また教示・援助をうけた。特に、小論に使用した実測図は、出典を明記した以外は今回新たに作成したものであるが、保管あるいは所蔵されている機関あるいは個人の方々には、長時間にわたって作図の便宜をはかっていただいた。以下、お世話になった方々のご芳名を記しここにあつくお礼申しあげる次第である。

赤澤威・阿子島香・東潮・磯崎文五郎・市原寿文・宇野隆夫・岡内三真・岡村道雄・置田雅昭・小田野哲憲・小野田勝一・柿沼幹夫・勝部明生・加藤稔・菊池義次・楠本政助・熊谷常正・車崎正彦・後藤勝彦・小林達雄・佐々木富夫・佐藤正彦・佐原眞・須藤隆・関義則・高井悌三郎・高橋信明・寺西健一・中野宥・中村五郎・西岡憲一郎・西村正衛・西本豊弘・林謙作・藤沼邦彦・本間亮法・正井秀夫・町田章・松浦有一郎・馬目順一・村井崑雄・毛利伸・柳沢和明・山口栄太郎・用田政晴・吉田恵二・吉田義昭の諸氏

参考文献

- 伊川津遺跡発掘調査団 1985『伊川津遺跡調査概報』渥美町教委。
 牛沢百合子 1679「骨角貝製品」(及川洵ほか)『太陽台貝塚』9～15, 52～53, 陸前高田市教委。
 江坂輝弥・渡辺 誠 1968「寺脇貝塚発掘調査報告」(渡辺一雄・馬目順一編)『小名浜』157～218, いわき市教委磐城出張所。
 大塚和義 1967「縄文時代の葬制」『史苑』27—3, 18～41。
 大場磐雄 1948『古代農村の復原』75～77, あしかび書房。
 大山 柏 1923「愛知県渥美郡保美貝塚発掘概報」『人類学雑誌』38—1, 1～25. Pl. I～V。
 大和久震平 1966『柏子所貝塚—第2次・第3次発掘調査報告書—』秋田県文化財調査報告書, 8。
 小野久隆・奥野 都 1978『池上遺跡』4—2, 木器編, 大阪文化財センター。
 加藤 孝 1968『埋蔵文化財第二次緊急発掘調査概報—西の浜貝塚—』宮城県文化財調査報告書, 16。
 金関文夫 1964「たましいの色—まが玉の起り—」続・発掘から推理する, 5・6,『朝日新聞』西部版2月9日・16日付夕刊(1975『発掘から推理する』朝日選書40, 34～40, 朝日新聞社。1982『考古と古代』28～33, 法政大学出版局)。
 菊池義次 1957「千鳥久保貝塚発見の骨角器を着装せる人骨に就て」『古代』25・26(合併号), 55～67。
 九州大学医学部解剖学教室編 1972『山鹿貝塚』山鹿貝塚調査団。
 清野謙次 1920「備中国浅口郡大島村津雲貝塚人骨報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』5, 29～63。

- 1923「考古漫録」『社会史研究』10—3, 16—26 (1925『日本原人の研究』275—277, 岡書院)
- 1949『古代人骨の研究に基づく日本人種論』本文・図譜, 岩波書店。
- 1969『日本貝塚の研究』岩波書店。
- ・金高勘次 1929「三河国古胡貝塚人の抜歯及び歯牙変形の風習に就て」『史前学雑誌』1—3, 43—68。
- 楠本政助 1973「先史」『矢本町史』1, 47—264。
- 甲元真之 1980「古代中国動物随葬墓考」(国分直一博士古稀記念論集編集委員会編)『日本民族文化とその周辺』考古篇, 565—592, 新日本教育図書。
- 小金井良精 1923「日本石器時代人の埋葬状態」『人類学雑誌』38—1, 25—48, Pl. VI (1928人類学研究』28—76, 大岡山書店)。
- 小林行雄 1943「土製品及び骨角牙製品」(末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎)『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告, 16, 208—220, 桑名文星堂。
- 1951『日本考古学概説』創元社。
- 後藤勝彦 1968「河北町南境貝塚埋蔵文化財第3次発掘調査概報」『宮城県文化財調査報告書』15。
- ・斎藤良治 1969「宮城県桃生郡河北町南境貝塚埋蔵文化財第4次緊急調査概報」『宮城県文化財調査報告書』20。
- 五来 重 1969『空也の寺六波羅密寺』148—164。
- 斎藤 忠編 1952『古胡貝塚』埋蔵文化財発掘調査報告, 1, 吉川弘文館。
- 佐々木 謙 1981「中の海の遺跡」『考古学ジャーナル』189, 13—15。
- 佐藤正彦編 1985『中沢浜貝塚発掘調査概報』I, 陸前高田市文化財報告, 9。
- 佐原 眞 1960「先史時代」『彦根市史』上, 70—112。
- 1979「鹿角製裝飾具」『1979年度秋季展 東日本の縄文文化』辰馬考古資料館。
- 清水潤三 1959『亀ヶ岡遺蹟』考古学・民族学叢刊, 5, 三田史学会。
- 酒詰仲男 1961「骨・角・牙・貝器・人骨」(末永雅雄編)『橿原』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告, 17, 252—262。
- 鈴木 尚 1958「石鏃が嵌入した先史時代人骨盤」『人類学雑誌』66—3, 12—15。
- 田辺昭三編 1973『湖西線関係遺跡調査報告書』本文編・図版編, 滋賀県教委。
- 坪井清足 1960「装身具の変遷」『世界考古学大系』2, 日本II, 69—77, 平凡社。
- 1968「準人権」(金関丈夫博士古稀記念委員会編)『日本民族と南方文化』297—305, 平凡社。
- 東北大学考古学研究室編 1982『考古学資料図録』1・2, 東北大学文学部。
- 中川真文 1982「骨・角・牙・貝製品」(愛知県教委編)『朝日遺跡』II, 79—87, 図版54・96, 第一法規出版。
- 中村五郎 1969「本邦歴史時代の鹿角杖について」『物質文化』14, 13—20。
- 中村徹也 1977「宮ヶ久保遺跡出土の木製武器形祭器」『考古学雑誌』63—2, 70—75。
- 西村正衛 1943「福島県真石貝塚の発掘並に其遺物の考察」『史観』30, 52—74。
- 1952「千葉県香取郡八都村向油田貝塚発掘概報」『古代』7・8(合併号), 28—44。
- ・金子浩昌 1956「千葉県香取郡大倉南貝塚」『古代』21・22(合併号), 1—47。
- 1961「千葉県成田市荒海貝塚」『古代』36, 1—18, 図版。
- 1965「千葉県成田市荒海貝塚C地点発掘報告」『学術研究』14, 133—152, 図版, 早大教育学部。
- 1984『石器時代における利根川下流域の研究』1—715, 早稲田大学出版部。
- 長谷部言人 1924「陸前名取郡増田村下増田経の塚出土鹿角製刀装具に就て。附, 石器時代鹿角製腰飾」『人類学雑誌』39—4・5・6(合併号), 141—164 (1927『先史学研究』540—577, 大岡山書店)。

- 浜田耕作・辰馬悦蔵 1920「河内国府石器時代遺跡 第二回 発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』4, 1~32, 巻首図版。
- 春成秀爾 1980「縄文晩期の装身原理」『小田原考古学研究会会報』9, 44~60。
- 1982「縄文社会論」『縄文文化の研究』8, 文化・社会, 223~252, 雄山閣。
- 1983「装身の歴史—採取の時代」『季刊考古学』5, 18~22。
- 林 謙作 1965「縄文文化の発展と地域性 東北」『日本の考古学』Ⅱ, 縄文時代, 64~96, 河出書房。
- 1984「宮城県下の縄文期貝塚群」『宮城の研究』1, 考古学篇, 109~172, 清文堂。
- 東根市文化財調査委員会編 1978『東根市の文化財』60~61, 東根市。
- 樋口清之 1939・1940「日本先史時代の身体装飾」『人類学・先史学講座』13・14, 1~113, 雄山閣。
- 1955「腰飾考」『国学院雑誌』56—2, 21~32。
- 堀 一郎 1953『我が国民間信仰史の研究』2, 宗教史編, 創元社。
- 前川威洋 1972「山鹿貝塚人骨着装品とその考察」(九州大学解剖学教室編)『山鹿貝塚』64~90, 山鹿貝塚調査団。
- 町田 章 1979『装身具』『日本の原始美術』9, 講談社。
- 松本彦七郎 1929「陸前国桃生郡小野村川下り響介塚調査報告」『東北帝国大学理学部地質学古生物学教室研究邦文報告』7, 1~65。
- 1930 a 「陸前国桃生郡小野村川下り響介塚調査報告附図」『東北帝国大学理学部地質学古生物学教室研究邦文報告』8, 1~4, Pl. 1~10。
- 1930 b 「陸前国登米郡南方村青島介塚調査報告」『東北帝国大学理学部地質学古生物学教室研究邦文報告』9, 1~47, Pl. 1~10。
- 馬目順一編 1975『大畑貝塚調査報告』いわき市教委。
- 丸山竜平 1973「入江干拓地の遺跡と鹿角製戈」『近江郷土史研究』3, 96~98。
- 三島 格 1973「鉤の呪力」『古代文化』25—5, 157~175, Pl. 6~8 (1977『貝をめぐる考古学』162~199, 学生社)。
- 宮本博人 1925「津雲貝塚人の抜歯風習に就て」『人類学雑誌』40—5, 167~181。
- 安本 博 1949「昭和十八年度登呂遺跡の調査」(日本考古学協会編)『登呂』前編, 132~149, 毎日新聞社。
- 吉田義昭 1960『門前貝塚』郷土資料館報告, 盛岡市公民館。
- 1968「岩手県下閉伊郡山田町田ノ浜貝塚」『日本考古学年報』16, 昭和38年度, 74~75, 誠文堂新光社。

追記

校了後、小林達雄氏の教示で、棒状短剣が長野県小県郡真田町菅平十ノ原・唐沢岩陰(縄文晩期末)と千葉県松戸市・殿平賀遺跡(縄文後期・堀之内Ⅰ式)から検出されていることを知ったので、愛知県渥美郡福江・保美遺跡(縄文晩期, 南山大学資料)出土例とともに、図5に追加しておいた。なお、図示はしなかったが、同様の短剣は、千葉県船橋市習志野台・高根本戸遺跡(縄文後期, 房総風土記の丘資料館)出土例がある。

- 永峯光一・樋口昇一 1967「長野県唐沢岩陰」(日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会編)『日本の洞穴遺跡』141~160, 図版35~39, 平凡社。

村上俊嗣 1967「松戸市殿平賀貝塚調査報告」『考古学雑誌』52—4, 56～70.

紅村 弘 1963『東海の先史遺跡』綜括編, 270～271, 名古屋鉄道.

八幡一郎・西野元・岡崎文喜編 1971『高根木戸』263～264, 図版107, 船橋市教委.

(本館 考古研究部)